

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取り組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 2 年 10 月 27 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 15名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	4名	

※事業所記入

事業所番号	愛媛県知事第3870104555号
事業所名	ユニットまつやま
(ユニット名)	A棟
記入者(管理者)	
氏 名	富田 勝正
自己評価作成日	令和 2 年 9 月 30 日

【事業所理念】	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】
ユニット・ワンの理念『悔いの残らないお世話をさせていただきま す』を実践できるように、「共に育 つ」「ゆっくり・一緒に・楽しく」「和 らかい言葉・温かい雰囲気・安心 できる居場所」を目標にしてい る。スタッフ一人ひとりが成長す る意識を持ち、より良いケアを 目指してチームで協力・努力して くことを目指している。	地域に暮らすご家族の方に運営推進会議を通してグループホームの取り組みを知っていただき、地域への働きかけも広げていきたい。 ご家族のボランティア参加もあり、今後も地域の方のボランティアの受け入れを広げていきたいが、今年度は新型コロナウイルス感染症 流行もあり、現状では事業所内で実施後、書面での報告にとどまってしまう。また、外出行事や定期的に行っていた法人内の行事 もすべてが中止になっており、ご家族の面会なども感染防止策を行いながら、時間制限をしている現状である。新型コロナウイルス感染 症の動向次第ではあるが、現状で出来る方法（タブレットなどを使用したテレビ電話など）を行いながら、今後も少しずつ地域内の住 民、学校や施設などとの交流を広げつつ、利用者が地域に出て行ける機会を提供したい。	事業所の周囲には田園が多く、自然豊かな環境である。法人本部は隣市にあり、事業所 を含めた3つのグループホームを運営している。事業所での職員の離職率は低く、同じメ ンバーで長く勤める職員が多く、風通しの良いチームで理念に則ったケアが実践できてい る。また、職員同士で成長し合いながら、利用者に安心できるサービス提供につながって いる。現在は、新型コロナウイルス感染症対策のため、面会や外出など様々なことに制限 が設けられているが、収束後には、さらにステップアップしようと令和2年の春に異動してき た管理者を先頭に、日々より良い継続した支援に取り組んでいる。

評価結果表

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅰ.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、 意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	本人の言葉を聞き取ることを大切にしている。また、表情から本人の思いをくみ取る努力をしている。面会時等は本人の様子や思いを伝え、家族の希望や思いも聞き取りながらご意向の把握に努めている。	◎		○	日々のかかわりの中で、職員は利用者や家族から思いや意向を聞いたり、汲み取ったりできるよう努めている。把握した意向等は、個別記録や看護記録に記録している。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	入居時に把握していた情報や、ご家族からお元気な頃の本人の思いについて情報を把握するよう努めている。チームで話し合い、「本人はどうか」という視点を大切にしている。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	ご家族等の面会時には日々の様子や本人の思いをお伝えしている。お元気な頃の様子を伺ったりして本人の思いと一緒に確認している。必要時は電話やメールなども活用して聞き取りをしている。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	本人のアセスメントには本人の今までの生活歴も記録している。日々の個人記録には、本人の直接の思いを記録するようにしている。また、共有ノートには、本人の変化した情報等を記録している。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	本人の言葉を丁寧に聞き取ったり、表情やしぐさの観察を大切にしている。スタッフ同士で情報を共有し、色々な見方や感じ方を大切にしている。				
2	これまでの暮らしや 現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入居時には時間を取り本人の様子を聞いている。ケアをするうえで本人の生活歴やなじみの暮らし方、こだわり等が重要だと認識し、入居後も面会等の時間を利用して、本人の情報を収集し把握している。			△	入居時に、職員は利用者や家族から、これまでの暮らしなどの情報を聞き取り、アセスメントシートを作成している。利用者の生活歴や状態は記載されているが、利用者の馴染みの暮らし方やこだわりなどを特別なことの欄に記載が不十分であったため、今後は、馴染みやこだわりなどの重要性を認識してアセスメントシートに追記するなど、定期的に更新できる仕組みの構築を期待したい。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	日々の生活の中で変化していく本人の状態や有する力、それに対するケアの方法を、スタッフ全員で共有できるよう、共有ノートに記録したり、朝の申し送り等で共有して把握している。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	本人の言動や表情、活動の状態をよく観察し、状態を把握している。また、それをスタッフ全員で共有できるよう、朝夕の申し送り時に丁寧に伝え、必要時は共有ノートに記録している。また、カンファレンス時に話し合うようにしている。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	○	適切な言葉で思いを表せないご利用者に対しても、日々そばで関わり表情や言動を観察し、いろいろなスタッフの観察や意見を共有しながら、不安の要因が把握できるように努めている。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	24時間個人シートに日々の様子を記録している。いつもとリズムや様子が違う時は、共有ノートや申し送りにて情報を共有し、適切なケアにつながるように努め話し合いをしている。				
3	チームで行うアセスメント (※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	本人の思いを大事に、状態を観察しながら、本人にとって必要なことは何かを、主治医や家族等も含めて相談しながらケアに生かせるよう努めている。			○	アセスメントは、医師や家族も含めて相談をしている。介護計画の更新時には、ユニットごとに出勤職員で話し合うほか、事前に参加できない職員にもメモに意見を書いてもらい、反映できるようになっている。意思を伝えることができない利用者もいるため、職員間で話し合い、思いを推測するようにしている。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	定期カンファレンスにて色々な視点から本人のより良い暮らしについてチームで検討している。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	ケアプランには、「本人の希望」「本人の困っていること」と記載をし、課題を明らかにしている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	生活歴や本人の意向を確認し、できる限りプランに反映するよう努めている。				介護計画は、ユニットごとに計画作成担当者が立案している。その際には、利用者の生活状況を観察し、利用者の意向や家族の意見も取り入れている。カンファレンスには家族も参加することもあったが、現在はコロナ禍のため参加を自粛している。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	本人の観察を重視しスタッフ間で共有しプランへ反映している。家族とのコミュニケーションも深め、計画書について話し合っている。医療連携も重視し、共有に努めている。	○		○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	△	スタッフとの関わり、安心できる環境作りを大切にしている。今年は面会制限もあるが家族とも連絡を取るよう配慮している。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	家族とのコミュニケーションを重視している。面会は制限ある中で行い、一緒に支える関係性を築いている。地域の人達との協力体制は難しい状態である。				
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	ケアカンファレンス時には、なるべく多くのスタッフの意見を聞き、反映している。個人の日々の記録にケアプランが記載されており、毎日チェックをしながら記録をしている。			◎	日々の記録用紙の余白には介護計画のサービス内容が印字されており、職員は記録時にも確認することができ、共有が図られている。記録には、利用者の様子は記載されているが、介護計画に沿ったケアの記録は少ないため、今後は記録の書き方を工夫したり、検討して改善したりするなどの取組みを期待したい。利用者が発した言葉は、そのままの言葉で分かりやすく記録されている。また、職員からベッドの配置の変更など、多くの気づきやアイデア等が出され、カンファレンスで検討している。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	個人の日々の記録にあるケアプランを確認しつつ実施できたらチェックしている。担当者が定期的に複数のスタッフと話し合い、モニタリングを行っている。カンファレンスの時には実施状況を確認している。			△	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	個人の記録には、本人の言葉をそのまま書くことを大切にしている。重度化した方の暮らしの様子の観察が不十分で、同じような記載になってしまっている。			○	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	△	ひとり一人についてのスタッフの気づきや工夫等を、朝夕の申し送り時やその都度に話し合い、まずやってみよう取り入れている。それぞれについての記録は不十分である。			○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	期間に応じてカンファレンスを開き見直しをおこなっている。状態変化時や退院時等必要に応じて見直しをおこなっている。			◎	介護計画は、原則6か月ごとに見直しをしている。月1回、各利用者の担当職員を中心に話し合い、変化がない場合は口頭での現状確認となっているが、3か月に1回はモニタリングをして評価をしている。状態に変化があった場合には、その都度介護計画を変更している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	担当者は、月に1度は複数のスタッフと話し合いモニタリングを行い、計画内容についての評価を行っている。			○	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	心身状態が変化したり、入院等があった場合は、本人、家族、主治医等に相談をし、随時見直しを行っている。			○	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	朝夕の申し送り時には、必要なことをその都度話し合い、状況や対応に変化がある場合は、共有ノートにてスタッフ全員と共有し、必要時はカンファレンス開催している。			○	定期的に全体でのカンファレンスは開催していないが、必要時にはユニットごとに個別のカンファレンスを実施している。朝夕の申し送り時を活用して話し合うほか、共有ノートを確認することにより、職員間で情報を共有している。また、共有ノートには、申し送り等の議事録の添付があり、参加できなかった職員は、確認後にサインすることになっている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	申し送り時や会議では、自由に発言できるような雰囲気作りに努め、意見も求めている。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	△	カンファレンス開催時は、多くのスタッフが参加できるようにしている。参加できないスタッフも、メモにて意見を伝えている。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	◎	カンファレンス記録は、全体の共有ノートに貼付か記入をして、スタッフ全員で共有している。			○	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	○	申し送り時にご利用者ひとり一人について丁寧に申し送りを行い情報を共有している。事務的な共有ノートと、各自の医療面についての共有ノートがあり、整理して共有している。			○	共有ノートには、アクシデントやインシデント記録など重要事項のコピーを添付し、職員は確認後にサインすることで、確実な伝達ができるよう努めている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	ご利用者各々の医療面についての共有ノートと事務的な共有ノートがあり、重要な情報は必ず記載するようにして、スタッフ全員で把握できるように努めている。	○			

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	利用者の意思がはっきりしている方については、意向を確認して、できるだけ意向に沿えるようにしている。意思疎通が困難な方にも選択できるような声掛けをし、反応を注意深く読み取る。				洋服やテレビ番組、おやつ、マニキュアの色など、職員は利用者に日常生活の様々な場面で自己決定できるように心がけている。また、利用者が安心して暮らせるように、職員は積極的に声をかけをして、思いや意向を聞いている。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	できるだけ利用者が、選択できるような声掛けを心掛けている。「ゆっくり・一緒に・楽しく」を目標に持ち本人の意思を尊重するよう努めている。			○	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	自室でゆっくり過ごす方、テラスを散歩する方、玄関のお気に入りの場所で過ごす方、テレビを見て過ごす方、馴染みの人とお話しを楽しむ方、本や新聞を読んだりする方等それぞれが思い思いに過ごせるような環境作りに努めている。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	△	基本のスケジュールはあるが、個別ケアを重視している。本人のペースに合わせて生活できるような支援を心掛け、できている利用者もいるが、そうでない利用者も一部いるので、今後の課題である。				
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	ケア理念の「和らかい言葉・温かい雰囲気・安心できる居場所」を常に頭に入れ、雰囲気作りに努めている。			○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	言葉が少なくても、表情にいつもと違いはないか、瞳の状態が穏やかか、肌の状態や表情、全身状態を観察し、本人の思いを感じるように配慮しながら声掛けケアを行っているが困難な場合もある。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	「尊厳と自立支援」についての研修に参加するなどして学ぶ機会を多く持ち、声掛けや非言語について意識している。できないことはさりげなく上の者が支援し、常に意識するよう努めている。	○	◎	○	ほとんどの職員は利用者の尊厳などを理解して支援することができている。稀に管理者が気になる行為などを見つけた場合には、職員に注意して改善している。トイレ誘導の際に、耳の遠い利用者に対して職員がつい大きな声を出してしまうことも見られるため、職員が気づいていない場合もあり、管理者はさりげない声かけをするように指導している。居室への出入りの際には、職員は利用者への声かけやノックが実施できている。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	△	支援が必要なご利用者は、それぞれ長い人生を一生懸命生きてこられた人生の大先輩だという意識を忘れないようにしている。しかし、スタッフの意識レベルの違いがあるため、今後も学ぶ機会を持ちレベル向上を目指していきたい。			○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら、安心できる関係性の構築や声掛けに努めている。				
		d	職員は、居室は利用者専有の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	利用者が居室に居る時は、ノックをしたり声をかけて入室している。本人が外にいる場合は、何をしに入るかを声をかけて入室する了解を得ている。			○	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	入居時には個人情報保護について書面について確認している。職員は守秘義務について理解している。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けってもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	介護は共同作業だと認識している。信頼関係を築きながら行い感謝の気持ちを伝えていく。また、教えてもらったり、意識されたりすることも多く、スタッフの喜びとなっている。				職員は利用者同士の人間関係を把握し、必要な場合は最小限の介入をしている。問題となる行動が見られても、不快な利用者がいない場合には、職員はあまり制止することなく、後からさりげなくフォローしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	気の合う利用者が良い関係を築くことができるようさりげなく支援することを重要と考えている。入居したばかりの利用者にはスタッフが間に入り利用者同士良い関係が早く築けるような支援に努めている。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わえる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	利用者一人ひとりの性格を出来るだけ把握し、トラブルになりそう時は、早めにさりげなく支援している。お互いの気持ちを理解し、それぞれの気持ちが生かされるような支援に努めている。			○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	△	それぞれの思いを大切に、さりげなく支援し、必要であれば個別に時間を持って支援する。スタッフによっては困難なこともあり、今後の課題である。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係 継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	△	キーパーソンとの信頼関係を築きながら、本人の関係者についてはできるだけ多くの情報を把握するように努めているが、まだ不十分である。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	キーパーソンとの信頼関係を築きながら、本人の情報をできるだけ把握するように努めているが、地域との関係や馴染みの場所などは全員は把握できていない。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	×	家族の支援を受けれる方は、家族の協力でできているが、スタッフの対応は難しい。現在は、コロナ禍の影響で外出等控えている。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	コロナ禍の影響でいつでも気軽にとはいかないが、少しでも安心して安全に面会できるよう予約制にし、感染対策を十分に行い実施している。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	×	多くの利用者が日常的に戸外に出て過ごすことは難しい。が、天気の良い日は希望する方にはできるだけ庭先での日光浴や散歩を心掛けている。季節の良い時期には、ドライブに出かけて季節を感じられるよう支援を心掛けているが、コロナ禍で実施できていない。	○	○	△	定期的に、ドライブでコスモスなどの花を見に行ったり、事業所周辺を散歩したりしている。現在は、新型コロナウイルスの感染症対策のため、庭以外の外出を控えているが、重度な利用者も含めて駐車場やテラスに出て、外気に触れることができるよう支援している。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	屋内でのボランティアの支援はあるが、外出支援はなかった。コロナ禍が落ち着いたら課題にしていく。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	△	天気の良い日は庭での日光浴を試みている。			△	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	×	普段は行けない場所には、出かけられていない。				
14	心身機能の維持、 向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	コロナ禍で去年に比べ減ったが、外部研修の参加や内部研修を行い、日々学んでいる。朝の申し送り時でも気になることは相談したり、良いことも上手いかなかったケアも共有しスタッフ全員で取り組む意識を持っている。				心身の状態の差を見極め、職員は利用者のできることはしてもらう支援をしている。利用者のできそうなことをケアカンファレンスで話し合い、介護計画に取り入れて支援をしている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	座位の状態・食べる状態の観察を大切にしている。目の輝きや皮膚状態等全身の状態の観察に努め、スタッフ同士でも情報共有を行っている。状態の変化を主治医・家族に相談し、できるだけ今の状態が維持できるようにケアの方法を工夫している。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	「ゆっくり・一緒に・楽しく」を目標に、それぞれの利用者合った「できる環境作り」をさりげなく行えるような声掛けに努めている。(洗濯物たたみもできそうな種類で分ける等)	◎		○	
15	役割、楽しみごと、 気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	個々の生活歴やこだわりを重視している。本人の楽しみや活躍できる役割の把握に努めている。(洗濯物たたみ、机拭き、トイレトペーパーチェック等)				カレンダーへのスタンプ貼りや花の水やり、掃除、洗濯ものたたみなど、職員は利用者に応じた役割を持って生活できるよう支援している。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	それぞれの楽しみや得意なことをスタッフ全員で把握し、さりげなく生活の中で力を発揮できるよう支援を心掛けている。何か手伝いをしてくださった時には必ず感謝の気持ちを伝えるよう心掛けている。	○	◎	○	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	×	地方祭、ボランティアを受ける楽しみはあるが、地域の行事に出かけていくことがない。				

愛媛県グループホームユニットまつやま

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしやれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つとらえ、その人らしい身だしなみやおしやれについて把握している。	○	本人の意向を大切にしている。ちがはぐな服を選んでいたりは、さりげなく支援したり整えている。				職員は利用者の服装の乱れや汚れなど、不具合がある場合はさりげなく支援している。2か月に1回、理容の訪問があり、利用者は散髪をしている。重度の利用者についても、職員は選択肢を絞って選びやすくするなどの工夫をしている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	◎	本人・家族と相談して整えている。2ヶ月に1度のペースで散髪を行い、髪型を保っている。髪のカットの時は、本人に希望を聞いている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	◎	本人らしさが出るように配慮している。自己決定が難しい利用者にも、必ず声掛けをしコミュニケーションを取り、その表情から意向をくみ取るように心掛けている。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	外出の時は普段と違う装いになるように選び楽しみとしている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にせずさげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	◎	着衣等が整えられなくなったり、こだわりがなくなった方も、さりげなく整え本来その方が望んでいた状態を維持できるようにしている。	◎	◎	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	家族と相談して対応している。家族と一緒に理容院に行く方もいるが、訪問理容を利用している方が多い。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	できるだけ本人が好むだろうものを家族と相談して整えている。			◎	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	食べることの重要性を理解している。食べることが楽しみになるように声掛け、雰囲気作りに配慮している。				外注業者から食材が届けられ、片方のユニットでまとめて職員が調理をしている。献立も外注業者が立てているが、2か月に1回は事業所との話し合いの場があり、希望を反映してもらうことができている。利用者は、下ごしらえや配膳、下膳などを一緒に行っている。食器等は、馴染みの物は自由に持ち込んでもらい、使用している。職員も利用者と一緒に食べるように努めているが、業務の都合で遅れて食べることもある。利用者の食べこぼしなどがある場合には、職員はさりげなくサポートできている。行事時のある場合には食材の配達を止め、職員が買い物などをして調理をしている。月1回程度、利用者の誕生日には、ケーキなどの特別なおやつを提供している。重度の利用者も、食堂に出てきて食べることができているほか、利用者から希望があった場合には、居室で利用者が一人で食事を摂ることもある。調理方法については、医療職にも相談しながら、その都度職員間で話し合いをしている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	机拭きや、食後の下膳はできる方は自分でやっている。お楽しみ献立のメニューはご利用者の意見を取り入れている。買い物や調理はできていない。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	△	買い物・調理・盛り付けについては現状では行えていないが、一部の方には後片付けや洗い物などを行っていただいている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	◎	毎日の食事の支援により把握している。台所に、個々の食事形態・好き嫌い・アレルギーのチェックリストがある。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	業者の献立を利用している。行事の食事はご利用者の意見を取り入れている。準備時より昔の話が盛り上がり楽しみなとなっている。その日の献立の内容をホールに貼りだしているの、楽しみに見る利用者がいる。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いどりとや器の工夫等)	○	利用者ひとり一人の状態に合わせた調理法としている。食器等はできるだけ陶器のものを使用し、料理に合わせて小鉢等を使用し、見た目大切にしつつ食べやすいように盛り付けている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	◎	それぞれの状態に合わせて食べやすいように食器や専用の箸・スプーンを選んで使用していただいている。			◎	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	△	食事介助が必要な方がいるので一緒に食べるのは難しい。介助をしながらも、テーブル全体を見守り、ひとり一人の状態の把握に努めながら、必要時は支援を行っている。			△	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	主治医や家族とも相談して、本人の状態に合わせた食事内容と形状にしている。献立の内容を伝えながら食事介助を行っている。テレビを消しヒーリング音楽を流し、落ち着いた雰囲気の中で食することができるように配慮をしている。	◎		○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	個々の状態に合わせた食事量としている。水分も個々の状態に合わせた物を提供し、量を把握し必要量が確保できるよう支援している。食事・水分量の記録もやっている。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	スタッフ間での情報共有に努め、主治医・看護師・家族とこまめに相談をしながら本人にとって良い状態が保てるように支援している。水分摂取量が少ない利用者には、種類を変えてみたり、時間をおいてこまめに勧めることで、必要量を確保できている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	栄養士がたてた業者のメニューを利用している。定期的に、業者担当者や調理担当者・管理者で検討を行っている。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	調理担当のスタッフが責任を持ち衛生管理をしている。食材はほぼ毎日届き、検食を3日間保存している。				

項目 No.	評価項目	小 目 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	口腔ケアの研修を行ったり、定期的に歯科医が訪問して指導を受けて理解している。定期的に配布される口腔ケアについてのポスターをホールに貼付し活用している。				食後等には共有スペースの洗面所で、利用者は歯磨きをしている。管理者は、口腔ケアの介助していない、自分で歯磨き等ができる利用者の口腔内の状態把握が弱いと感じている。利用者の能力に合わせて、磨けていないところなどの介助をしている。歯科医の訪問診療を利用している利用者もあり、必要時には受診につなげることができる。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	△	口腔ケアの際に確認しているが、細かい部分までチェックできていない。必要時は家族・歯科医に相談して対応しているが自己管理されている利用者は訴えがない場合は把握できていない。			△	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	△	定期的に歯科医が訪問しており指導を受けているが、自立で口腔ケアを行っている方は、正しい口腔ケアが行われているか十分に把握できていない。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	△	口腔ケア時は、ご利用者の状態に合わせスタッフが義歯を外し一部介助を行っている。自分で行う方は、適切な手入れができているか十分に把握できていない。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	口腔ケア時は、ご利用者の状態に合わせ、一部介助・全介助で支援している。できるところは自分で行えるように声掛けし支援している。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	○	異常がある時は、家族、歯科医に状態を相談して早急に対応するように支援している。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	排泄の支援が、本人の尊厳を守る支援であること、本人の意欲に繋がる事などを研修等に参加し理解している。				職員は、利用者がトイレで排泄できることを基本として支援している。利用者の様子を観察しながら、カンファレンスで利用者に合わせた排泄用品の使用などを職員間で話し合っており決めている。利用者や家族の意見もしっかりと受け止め、職員は可能な限りトイレへ誘導して排泄を促している。現在、紙おむつを使用している利用者が2名いる。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	便秘が生活に重大な影響を及ぼすことを医療職から指導を受けたり、また研修等に参加して理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	△	排泄の状態把握の重要性を理解し、日々の排泄支援において把握し、スタッフ間で共有したり、排便チェック表を活用しているが自己にて排泄される方の確認が困難な場合もある。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	○	本人の状態を観察しながら、昼間はできるだけトイレの使用を試みている。紙パンツ等の使用の変更についてはスタッフ間で相談し、本人の身体状態や排泄状態に合わせ適切であるかその都度検討している。	◎		○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	本人の状態観察と、排便チェック表などの記録も確認しながら、看護師・主治医・家族と相談し、状態の改善が行われるように調整等を行っている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	個々の排泄リズムを把握し誘導を行ったり、オムツ交換の間隔を調整したりして、早めの声掛けや支援を心掛けている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	本人や家族と相談をしながら選択している。業者のサンプルパットを試用し、本当に必要か検討をし、日中は活動し易いように、夜間は安眠しやすいように選択している。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	それぞれのご利用者の状態に合うものが重要と考えているので、個々の状態に合わせて家族とも相談をして使用している。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	水分摂取量の把握、日中は体操を行ったり、個々の状態に合わせ、水分の種類や温度にも気を付けている。主治医との連携も密に取りながら、必要時には下剤も使用している。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)。	○	週に2回入浴できるよう設定しているが、体調不良や本人の希望がある時は、日や時間を調整している。季節に応じて湯の温度を調整したり、入浴剤を変更したりしている。温度や長さは本人の好みに合わせているが、配慮が必要な場合は支援している。	◎		○	週2回以上、利用者は入浴することができる。入浴は午前中を中心に実施しているが、利用者の希望があれば、午後入浴にも対応している。湯温や時間、入浴剤などは、職員は利用者の好みや希望を聞いて、個別に対応している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	◎	お風呂が一番楽しみという方もたくさんおり、入浴による楽しみや清潔保持の重要性を理解しており、楽しい時間になるように声掛け支援している。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	常に安全に注意して見守りは行いながらも、本人の力が活かせるように支援している。また、できない部分も声掛けし一緒に行うように支援している。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	個々の気持ちの理解に努め、声掛けを工夫したり、入る曜日や時間を調整したりして気持ち良く入浴していただけるよう努めている。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	朝のバイタルチェックをもとに健康状態・顔色の様子・夜間の状態、入浴前の状態等を把握し、気になる時は看護師等に相談している。入浴後は水分補給や休息・見守りの配慮をしている。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	夜勤者は、2時間毎の巡視を行い、気になる方は防室回数を増やし睡眠状態を確認し記録している。朝・夕の申し送り時に生活のリズムについて情報を共有している。スタッフも個々で個人記録をこまめにチェックするよう努めている。				どうしても利用者が眠れない場合には、医師と相談しながら内服薬を処方してもらっている。ほとんどの利用者は、日中の活動量や起きている時間を増やすことなどにより内服薬を使用せず眠ることができている。また、入居後に内服薬が不要になった利用者もいる。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	新聞折りや洗濯物たたみ、塗り絵や他のレクリエーションを行い日中にできる限り起きている時間を作るよう工夫し、夜間長眠につなげるように取り組んでいる。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	睡眠剤を使用している利用者はいない。主治医も生活レベルの低下予防、転倒予防の為に薬に頼らない、又は必要最小限の使用との指示がある。まず、環境整備（スタッフの対応も含む）を工夫することが重要だと考えている。			○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	○	個々の個室の他に、リビングにソファや椅子、玄関スペースにも椅子を置きそれぞれが好きな時に利用できるようにしている。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	新型コロナウイルスの影響で、面会が思う様にできていない。タブレットを導入し家族とTV電話で話せるよう支援している。年賀状や季節の便りをいただいた時は、個々の状態に合わせて本人が理解できるように支援して家族との繋がりを大切にしている。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	△	日頃のレクの中で書き物を書いてもらえるよう支援している。また、毎月のカレンダーの色塗り、誕生日のメッセージなども動めている。その内容を家族に伝え、家族に対する思いも伝えていく。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	日頃より家族とのコミュニケーションは大切にしている。必要な時は、いつでも電話ができるよう支援し、タブレットも導入しテレビ電話等で活用している。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	届いた手紙等は、本人と家族との大切な繋がりであり、大切に取扱っている。家族以外からの手紙は、キーパーソンに伝え繋がりを保つことができるように支援している。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらったともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	タブレットを活用し利用者といつでも(テレビ)電話ができることは、家族に周知していただいている。面会の規制があるのでなかなか会えない中、タブレットで写真や動画を撮り、家族に送っている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	本人がお金を大切に思う気持ちは理解し、必要に応じて買い物などの支援時に使ってもらっている方もいる。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	△	現在は、コロナの影響で買い物に行くことが困難な為、実施できていない。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	利用者が買い物に行く時はスタッフも一緒なので、困らない支援を行っている。今後、よく行く商店等には利用者が自分の力を発揮できるよう、買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っていきたい。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	×	現在は、家族と相談のうえ、家族が管理している。買い物時などに必要な場合は、事業所で立替え使っていただいている。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	×	重要事項でも説明をし、利用者が所持は基本的に行っていない。現状、話し合いは行っていない。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしておき、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	基本、家族に管理をしていただいている。家族が管理できない場合は、家族に書面上で同意の上、会社が預かり管理している方もいる。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	常に家族と相談しながら、本人にとって良い方法を工夫して対応している。必要時は会社へ相談し、定期受診の対応、家族の相談ごと等にも対応している。	◎		○	利用者の希望により、職員が馴染みのかかりつけ医への同行受診をしたり、地元の桜を見に行くことが実現するなど、職員は家族等と相談しながら対応している。入居後に、成年後年制度の利用につながった事例もあるなど、利用者の権利擁護の支援にも取り組んでいる。

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	建物周囲に外壁はなく、オープンな雰囲気である。庭には木や草花を植えている。玄関は全面ガラス扉で訪問しやすい雰囲気である。	◎	◎	○	玄関前の花壇やプランターには色とりどりの花が植えられており、利用者や来訪者は四季を感じることができ、来訪しやすい雰囲気づくりをしている。玄関を入ると長いすが置かれてあり、コスモスが活けられていた。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそごような設えになっていないか等。）	○	平屋で中庭を囲んだコの字型の建物である。中庭にある大きな木も居間からよく見え、天窓もあり明るい作りである。広い居間には毎月、季節を感じられるような作り物を施している。玄関には複数の椅子を用意しているので、ご利用者が外の景色を眺めたり日向ぼっこを楽しんでいる。	○	○	○	玄関を入ったところで、ウサギを1羽飼育しており、利用者等の癒しの場となっている。共有スペースには、オープンキッチンや畳コーナー、いす席、テレビとソファ席があり、季節のクラフトが飾られている。事業所内は、天窓からの採光が入り明るく、整理整頓もなされ非常に清潔感がある。テラスから見える田園風景は、季節感に溢れている。また、廊下には、行事の時の写真が誰でも自由に見られるようにアルバムを掛けられている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	ホームの前は田畑で、車の通りも少なく静かである。平屋で天窓があり明るい。朝と夕に場所を分け掃除をしている。トイレなどの臭いにも気を付けている。	/	/	/	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節感を感じるもの）を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	玄関やテラスからの眺めが良く、玄関前には田畑が広がり、中庭からの景色も季節感を感じることができる。	/	/	/	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合うご利用者同士で思う様に過ごせる時間を大切にしている。個室などで一人になれる時間も過ごせるようにさり気なく支援している。	/	/	/	
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	◎	トイレや浴室は居間からは直接見えないようになっている。プライバシーに配慮している。	/	/	/	
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	入居時に家族と相談しながら、馴染みのものを持ってきたりしている。また、危険はないか落ち着けるかなど、よく検討し居心地の良い居室になるよう努めている。	◎	/	○	居室には、ベッドやチェスト、洗面台、クローゼットが備え付けられている。利用者は馴染みの物を持ち込みことができ、仏壇や家具、テレビ、写真、携帯電話などを自由に配置し、利用者に合った居室づくりができている。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	◎	トイレには分かり易い表示をしたり、自分の居室も入り口に名札を置いている。必要な方はそれ以外にも目印になるようなものを貼り、自分で好きな時に部屋に帰れるように工夫している。	/	/	◎	新型コロナウイルスの感染症対策として家族等の面会制限をしているため、タブレットを購入しSNSを活用して面会を支援している。ダンスの中に入っているものが分かるようプレートを貼ったり、トイレや御手洗いなどを複数表記するなど、利用者が混乱しないような工夫が見られた。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	◎	ダンスや机の上に自分で服を出したままにしているのを見て、誰かが入って触ったと不安になる方は、さりげなく整理整頓をし、不安を解消している。利用者の状況に応じ、置き場所なども変えている。	/	/	/	
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ぼうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	△	新聞は手に取れるようにさり気なく置いているが、その他の者は置いていない。しかし、それぞれの興味ある活動ができるように、スタッフが必要時に用意し、声掛けして活動ができる様に支援している。	/	/	/	
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	○	理解はしているが、玄関は常に見守りを行うことが難しいので普段はロックをスタッフがリモコンで操作している。スタッフが常に見守りができる時は解放していることもある。居室は自由に出入りができるようにしている。	×	×	×	常に職員が利用者の見守りを行うことが困難な場面もあり、玄関は安全面を考え、日中・夜間ともに施錠をしている。散歩の時などには、職員が開錠する対応をしている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話合っている。	△	利用者の安全優先の為に家族には説明し、ご理解を頂いている。玄関は常に見守りを行うことが難しいので、離脱の危険性やまた感染予防の為に、閉まっている状態。	/	/	/	
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	△	利用者の安全を考慮し、見守りが十分に出来ない時はカギを閉めているが、職員と一緒に過ごすことができる時は、玄関のドアなどをオープンにしている。地域の行事の時もオープンにして一緒に楽しんでいる。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	病歴については個々のアセスメント表にして、何度も読み返して把握できるよう心掛けている。訪問診療や病院受診時の情報も共有ノートにて把握し、個々の状態の変化を把握している。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	申し送りの際に、個々の状態変化について丁寧に情報を共有しながら、必要時には、日々の記録・共有ノートに記載している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	事業所内の医療連携看護師との情報共有を大切にしている。気になることがあれば、家族、主治医へ早め早めに相談を行い指示を頂いている。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	主治医は本人・家族の希望により決めている。本人の状態変化によっては、本人がより、安心してグループホームで過ごせるように家族と相談して主治医を変更することもある。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	医療連携を重視している。本人・家族と医療・事業所が常に連携を取り、適切な医療が受けれるように情報の共有に努めている。訪問診療時は丁寧に情報を提供し、受診時は手紙等にて情報を提供している。必要時は受診に同行することもある。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	基本、受診は本人・家族・看護スタッフ同行が望ましいと考えているが、家族のみ・スタッフのみの同行となる場合も、受診前に情報共有し、受診後も速やかに情報共有をするようにしている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院前、入院時状態のアセスメント情報を提供している。また、入院に至る経緯についてや、最も注意する点など本人の混乱が少しでも軽減するように努めている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	入院時より、病院の地域医療連携室と連絡を取りつつ、情報共有に努めている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	◎	入院中も可能な限り、病院を訪問していたが面会禁止のため、今年度は訪問できず。電話にて状態把握し、地域医療連携室と情報を共有し、退院に向けての相談を行っている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	スタッフはグループホーム看護師との情報共有を大切にしている。必要時には看護師より主治医・家族へ相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	24時間の医療連携体制加算を取れる体制を作っている。医療連携看護師との24時間オンコール体制を取っている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	申し送り時に個々の利用者の気になることを共有し、医療連携看護師・総括看護師に相談したり、必要時は早めに医療機関に相談して異常の早期発見につなげている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	△	医療連携看護師・各棟のリーダーは、必要時には薬情報を確認をしているが、全員の利用者の全ての薬の内容把握はできていない。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	毎食後の薬を、個人の名前を書いた場所に入れ管理をしている。全ての薬に利用者名を記入している。個々の状態に合わせて服薬介助や見守り・確認をおこなっている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	本人の状態観察は全スタッフで行い情報を共有している。必要な時は看護師・主治医に相談している。特に薬の処方に変更があった場合、細やかな観察で本人の心身の安定につながっていない場合は直ぐに主治医に相談している。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	処方変更の場合は、看護師・主治医へ服薬後の状態を伝えている。また、家族にも状態を必要時には伝えている。また、薬局との情報共有にも努めている。				

愛媛県グループホームユニットまつやま

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	入居時に重度化した場合の看取りの指針について説明している。家族へ日頃より本人の状態を伝え、元気な頃より将来について本人、家族の希望や要望をお聞きする機会を大切にし、意向を確認している。				事業所には、「重度化した場合における（看取り）指針」があり、入居時に職員は利用者や家族に説明している。看取り支援時には、家族や医師、看護師、介護支援専門員、職員で話し合い、情報を共有して同意書を取ったうえで支援している。実施した支援内容は、個別に記録されている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	常に、状態変化時には本人・家族と医療機関そして職員が情報共有し、相談を重ね、方針を決定し情報共有している。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	◎	常に職員の思い、力量を把握しながら終末期対応の支援内容をチームスタッフ、主治医・家族とも確認しながら、決定している。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	終末期対応（看取り）をおこなう場合は、看取りの指針を基に、丁寧に本人・家族へ説明し理解を得ている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	終末期は特別なことではなく、日々の生活の先にあるものと考え、状態変化に備え、家族・医療機関への情報提供を密におこない、連携を強化し、できる限り本人や家族が安心できる生活を目指してスタッフ全員で日々のケアについて相談しながらチームで支援している。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。（心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等）	◎	家族とコミュニケーションを大切にしている。電話・手紙・面談等で常に情報共有し、信頼関係を築いている。本人を通し、家族のプライベートの事情等も相談を受けている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症（ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等）や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	外部研修に参加している。内部でも看護師による感染予防の研修にて学んでいる。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	研修で学んだ感染症発生時の対応手順を、紙面にて皆が確認できるところに掲示し、定期的に感染症委員会を開催してスタッフ全員が手順に沿った対応が出来る様に努めている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	◎	行政からのお知らせはその都度確認している。総括看護師や主治医からも定期的に情報提供があり、早めの対応を行うように努めている。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	○	新聞、テレビ、行政、主治医、感染委員会からの情報等により早めの対応を心がけている。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	新型コロナウイルス対応もあり、職員は毎朝検温や手洗いを徹底している。来訪者についても検温や消毒・マスクの着用をお願いしている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	家族は、本人の大切な方であり、本人を支えるチームの一員であると捉えている。				地元の社会人野球チームや幼稚園児を招いて餅つきをしたり、法人内の事業所合同で運動会を開催したりしていたが、今年は新型コロナウイルス感染症対策のため中止していることもあり、家族へ行事参加の機会も提供できていない。面会の制限もあり、家族等に事業所での利用者の様子を知ってもらうため、毎月写真を中心にした事業所便りを発行するほか、3か月に1回は各利用者の担当職員から家族に手紙を添えている。また、事業所ではタブレットを購入し、SNSを活用した利用者の面会も支援しているほか、状況を見ながらシールド越しで面会できるよう支援している。家族と話す機会も減っているが、職員は面会時等を活用して、積極的に声をかけ、意見や要望を聞いている。運営上の出来事は、事業所便りを活用して周知している。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	△	家族は本人にとって大切な存在であり、本人を支援していく上での重要なチームの一員と考えている。面会に来やすい雰囲気作りを心がけている。コロナの影響で今年度は面会制限を行っているが良好な関係性構築に努めている。宿泊の実績はない。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	×	今年度は新型コロナウイルスの影響で、家族とのイベントなどはすべて中止している。	○		△	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。('たより'の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	◎	毎月、全員の家族に日常の様子を写真で載せたお便りを発送している。各担当者が定期的に利用者の様子を書きの手紙にてお知らせしている。面会できない家族へのテレビ電話なども整備してお知らせしている。	○		◎	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的な内容を把握して報告を行っている。	○	ケアプラン更新時や面会時に状態報告をおこない、気になることがある時は、その都度個別に相談報告をしている。遠方の方や来訪の機会の少ない家族には、電話やお手紙にて相談報告を行っている。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	入居時、本人の生活歴等を聞き取る中で、家族との関係の理解にも努めている。本人が家族のことを忘れてきている。本人の状態が変化している等、認知症の進行に伴う家族の戸惑いについて、面会時や電話等で本人の状態を伝えつつ、本人との良い関係が築けるように支援している。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	◎	毎月の家族へのお便りにてその都度報告をし、来所頂いた家族様にはその都度報告を行っている。	○		○	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	×	現在、家族会はなく、運営推進会議や行事等で交流があったが、今年度は行事も中止のため難しい。				
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	可能な限り自分のできることは自分でできる様に支援をしているが、転倒などのリスクも大きい。見守り、環境整備等の支援について伝えつつ、それぞれのリスクについても説明し、ご理解をいただいている。				
38	契約に関する説明と納得	j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行っている。	○	面会時は、必ずスタッフが本人の様子を家族に伝え、家族からの気になること等、家族の思いを聞くようにしている。必要な方には個別に連絡を取っている。玄関には「意見箱」を設置している。			○	
		a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	○	入居時に具体的に内容を説明し、理解・納得を得ている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退居については、入居時に条件を家族へ説明し、退去になった場合、本人にとって一番良い選択肢になるよう相談し、納得のいく退居先に移れるよう支援を行っている。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	○	契約時は、重要事項説明書・契約書に沿って丁寧に説明をして(？を付けながら行う)同意を得ている。変更事項は文章にて示し同意書を頂いている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	△	事業所設立当初から、地域運営推進会議等を通して、事業所の様子や取り組みを伝えているが、それ以外の交流が少ない。		○		事業所として町内会に加入しており、回覧板を回したり、散歩時には地域住民に挨拶を交わしたりすることはできているが、地域からの働きかけはまだまだ少ない。管理者は、もっと地域との交流を持ちたいと考えている。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	○	近隣の方とは、通勤途中や散歩時に挨拶や短い会話を交わすが、それ以上の交流までには至っていない。小さなお子さんを連れて散歩の途中に立ち寄ってくれる方いたが、コロナの影響で外部の訪問を規制している。		△	△	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	以前、一度だけ利用者が離棟してしまった際に声を掛けてくださったことはあるが、地域との関わりは今後の課題である。				
		d	地域の人々が気軽に立ち寄ったり遊びに来たりしている。	×	地域運営推進会議に出席して下さる方、ボランティアに来て下さる方は、気軽に立ち寄って下さるが、現在はコロナの影響で外部の訪問を規制している。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	×	散歩時に挨拶や会話を交わすが、日常的なお付き合いまでにはなっていない。今後の課題である。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	×	ご利用者の日常的な活動の支援までは働きかけることはできていない。				
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	×	一人ひとりの地域資源の把握は不十分である。改めて、研修等で学び、資源の把握をしながら支援していきたい。				
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	△	災害時は、地域の福祉施設に協力を得ることができる関係である。今後は、その福祉施設の行事に参加する等、交流を深めていきたい。消防署へは年2回の非難訓練時や運営推進会議出席時にグループホームの状況を説明し、理解を得ている。他の地域の方々への働きかけは今後努力していきたい。				
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	△	以前は、少しずつ新しく参加して下さる方が増えていたが、コロナの影響で外部の訪問を規制している為、現在は最小限の人数で行っている。	○		○	運営推進会議は、新たに地元の民生委員などに声をかけ、以前は参加してもらえなかった方にも参加してもらえることができている。現在は、新型コロナウイルス感染症対策のため、書面での会議となっている。会議では、利用者の様子やサービスの実態など報告を行い、参加者と意見交換をしている。会議の中で話し合われた内容は議事録に残しているが、参加できていない職員やメンバーまでは回覧等ができていない。今後は、参加者から出された意見やその後の取り組み状況から結果まで流れとして議事録に残すなど、多くの関係者と会議内容を共有できることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実態、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	○	運営推進会議にて毎回、利用者の生活の状態、グループホームでの取り組みについて報告している。自己評価・外部評価・目標達成計画についても報告している。			○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	○	運営推進会議で頂いた意見については、取り組みや改善点などを次回の運営推進会議の際に状況報告している。長寿介護課・ユニット・ワン事務局にも伝えている。		×	△	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	×	テーマに合わせて参加の声をかける方の都合の良い曜日を配慮しているが、今年はコロナの影響で、外部参加は見送っている。		○		
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	×	運営推進会議の内容を、玄関には張り出しているが、ホームページ等には公表していない。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	◎	ユニット・ワンのスタッフ全員で、理念に基づいた新たなケア目標を考え決定した。全スタッフは理念を理解し、個々の目標掲げ、日々取り組んでいる。半期で自己評価を行い、半年に1回管理者と目標の振り返りを行い、達成状況を確認している。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	毎月のお便りや地域運営推進会議にて、毎回、理念・目標と、日々の取り組みについて伝えている。	◎	×		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	△	各スタッフは、最低年に3回の研修を義務付けられており、研修参加のための年間予算も組まれているが、今年度はコロナの影響で内部・外部研修ともに実施も少なく、参加する機会が減っている。				代表者は、隣市の事業所に常駐しており、何かあれば必ず駆けつけることができている。また、令和2年の春に異動してきた管理者は、どの職員からも話しやすいような環境づくりができている。もともと事業所での職員の離職率は低く、長年同じ職員が勤めていることもあり、利用者に安心できるサービスが提供につながっている。また、法人・事業所として、介護福祉士の資格取得のため受験費用を助成したり、カウンセラーによる職員の面談を実施している。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	理念や目標について伝えチームの方向性と同じになるように取り組んでいる。現場で起こっている様々な問題を取り上げカンファレンスや研修を行い、スタッフ全員参加で意見を出し、皆で振り返りを行っている。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	◎	年に2回自己評価、管理者評価を法人に提出し、代表による個人面談を行っている。そこで、個々の意見を聞き、職場環境・労働条件の整備に反映したり、本人のモチベーションがアップするような場になるように努めている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	地域密着型サービス協会、ケアマネ連絡会、研修等にてつながりを広げている。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	介護労働安定センターのカウンセラーの面談を全職員が順番に受けることができる。必要時は、代表者との面談もいつでも可能であり相談ができる。	○	○	◎	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	内部研修も積極的に行い、3カ月に1度、身体拘束廃止・虐待防止についての会議を行っており、繰り返し学び理解を深めている。				虐待防止委員会を3か月に1回実施しているほか、年1回内部研修を実施し、職員の虐待防止等の理解に努めている。外部研修に派遣した場合には、職員が研修の伝達報告を行い、職員間で共有している。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	申し送り時、日々のケアについて話している。日常的に数分でもケアについて振り返ったり、話し合ったりする機会を意識して持っている。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見逃されることがないよう注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	内部研修等を通して、理念や目標を確認し、常に意識できるように努力している。3ヶ月に1度虐待防止についての内部研修を行い、不適切なケアについてさらに全スタッフの理解が深まるよう努力している。			○	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	ケアはチームで行うものと考えている。スタッフの状態を確認しながら、体調不良時には交代をしたり、必要時はリーダーや管理者に相談できる。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	△	虐待防止・身体拘束の適正化の研修は受けているが、全スタッフの理解を深める努力はこれからも必要である。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	3ヶ月に1度の「虐待防止・身体拘束廃止」の委員会開催時に、点検の機会を設けている。日常的にも、その行為が虐待・身体拘束に当たらないか確認・意識している。				
		c	家族等から拘束や施設への要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	△	家族に丁寧に繰り返し説明し、理解を得る努力をしている。取り組みの工夫やリスクも含めて丁寧に伝え、コミュニケーションを取り信頼関係を築く努力をしている。				

愛媛県グループホームユニットまつやま

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する 制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	△	研修を受けている。全スタッフへの周知は現状では行っていないため課題である。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	○	成年後見制度を利用するまでに家族からの相談に親身にのり利用に至った。今回の事例をもとに今後、希望がある方には親身に相談、支援にあたりたい。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	地域包括支援センター、専門機関とはすぐに連携が取れる体制である。ユニット・ワンの弁護士にも相談できる。				
46	急変や事故発生時の 備え・事故防止の 取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	◎	緊急時の連絡体制マニュアルがあり、全スタッフが周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	応急処置のマニュアルがある。看護師等と情報を共有して対応できるようにしており、傷応急処置ができるように救急ボックスも用意しているが全スタッフが適切な対応が行えるかの不安もある。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	◎	インシデント・アクシデントの報告書があり、早めの対応で事故予防に役立っている。報告書の対応策については、できる限り多くのスタッフが参加して検討を行い、再発防止に繋げている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	個々の利用者のリスクについては、カンファレンス等を通して日常的に把握・共有し、事故予防に努めている。				
47	苦情への迅速な対応と 改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	苦情対応のマニュアルはある。利用者、家族の思いに寄り添うケア、常に相談し合う関係性を心がけている。スタッフは常に、リーダー・管理者と情報を共有しており早めの対応を行っている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	利用者・家族・地域より苦情が寄せられた場合は、速やかに対応している。必要時は市町村にも報告するが、今までそのような事例はない。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	苦情が寄せられた場合は、速やかに対応し、前向きな話し合いと関係づくりを行っていく。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	利用者が遠慮なく意見、要望、苦情等が言えるよう、日頃からコミュニケーションを多くする努力をしている。地域運営推進会議には、数名の利用者の参加の機会があり意見を述べた。			○	職員は利用者から苦情が出ないように、日々の関わりの中で意見や要望を確認し、可能な限り対応している。家族からは、面会や電話連絡時に要望を聞いている。管理者は職員から信頼され、様々な職員の意見を拾うことができている。また、法人本部からも、きめ細かい指示や労いの付箋が頻回に届いている。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	家族とのコミュニケーションを大切にしている。以前より頻度は多くなっている。地域運営推進会議には、なるべく違う家族参加をお願いした。コロナ感染防止の為、後半は参加なし。	○		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	玄関ホールに苦情窓口を紙面に掲示している。また、意見箱の設置がある。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	代表者は毎月行われる管理者会議により事業所内の様子を把握している。必要時は、現場の様子を見学し、直接、職員と話す機会がある。必要時は、個々職員との面談がある。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	管理者は、現場での勤務時間が長く、24時間いつでも連絡がとれる体制ができている。利用者本位の支援をしていくための目標を持ち、個々の職員の意見を聞いている。一方的にならず意見、提案を大切にしている。			◎	

愛媛県グループホームユニットまつやま

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	年1回、自己評価の項目を全職員で確認、評価してサービスの更なる向上を目指している。				外部評価の自己評価の作成には、職員全員で取り組んでいる。サービス評価の実施にあたり、利用者や家族、各機関と共有できる書面での仕組みづくりなど、さらなる取組みを期待したい。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	○	評価を通して、できていることの継続、できていないことの改善、新たな問題、課題を確認している。その内容は、職員会議により全職員に周知している。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	×	地域との交流に力を入れたかったが、コロナ感染予防の為、外部との交流が殆んどできなかった。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	毎月発行のホーム便り、地域運営推進会議において、評価結果や目標達成計画を紙面で報告している。	×	×	△	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	地域運営推進会議で報告し、その内容を玄関ホールに掲示している。誰にでも閲覧できるようにしている。職員にも会議にて内容報告し、共有できている。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	◎	様々な災害マニュアルを作成している。火災、地震、風水害の訓練時には、事前より予定表を詳しく作成し、各職員に分担内容を説明してから訓練に臨んだ。				事業所では、火災や水害、地震を想定した避難訓練を実施している。今年度に入り、新型コロナウイルス感染症対策のため、地域住民や家族が参加した訓練はできていない。運営推進会議等を通して、地域住民等と防災について話し合っている。水害を想定した訓練では、実際に隣市の系列事業所等まで、実際に車に分乗して利用者と一緒に非難を体験している。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	◎	特に風水害の避難訓練に力を入れた。詳細な計画を立て、他事業所の応援を受けながら避難訓練を2回行った。また、風水害を想定し、利用者を帰宅、病院入院、ホテル宿泊に分け詳細な計画を立てた。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	保安協会、消防署の定期点検を受けている。避難経路の環境整備も常に意識している。非常食、備品の定期点検を行っている。雨水侵入止、各利用者の衣類、特長入り名札、オムツ類の非常袋を追加した。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	地域運営推進会議を通して、地域住民、消防署との連携を大切にし、訓練や相談をしている。緊急の避難先として近隣の福祉施設の協力体制をとっている。	△	×	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	○	事業所内の災害時避難訓練には、消防署、地域の方の協力があるが、災害時想定との共同訓練には参加できなかった。今後、地域との協力、強化が課題と考えている。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	○	認知症ケアについての内部研究の機会は多かった。地域運営推進会議で地域の方へ認知症ケアの内容をお伝えする機会があり、地域の参加者から相談を受けることもあった。				事業所では、入居相談含めて地域住民等から相談があれば、その都度対応している。最近、近くの高校から学祭への招待があったが、新型コロナウイルス感染症対策のため中止となっている。管理者は、コロナ禍の対策以前から、地域のケア拠点等の取組みは課題となっていたところであり、収束後には課題への対応を考えている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	入所希望者、その家族には、相談支援を必ず行っている。入所している利用者家族とも本人だけでなく、家族自身の相談があれば応じている。地域の方へ認知症ケアの相談の場であることを広めたい。		×	○	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	×	コロナ感染予防があり、地域の人々が集う場所として解放、活用ができていない。今後の課題として取り組みたい。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	コロナ感染予防の為、恒例だったボランティア活動、中学生実習の受け入れが中止になった。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	×	地域活動を行いたいと思いつながら、職員勤務時間等により、参加できていない。今後の課題として考えたい。			△	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

Ⅰ.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

Ⅱ.家族との支え合い

Ⅲ.地域との支え合い

Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 ジャンプ 評価の公表で取り組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 2 年 10 月 27 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 15名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	4名	

※事業所記入

事業所番号	愛媛県知事第3870104555号
事業所名	ユニットまつやま
(ユニット名)	B棟
記入者(管理者)	
氏 名	富田 勝正
自己評価作成日	令和 2 年 9 月 30 日

【事業所理念】	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】
ユニット・ワンの理念『悔いの残らないお世話をさせていただきま す』を実践できるように、「共に育 つ」「ゆっくり・一緒に・楽しく」「和 らかい言葉・温かい雰囲気・安心 できる居場所」を目標にしてい る。スタッフ一人ひとりが成長す る意識を持ち、より良いケアを 目指してチームで協力・努力して くことを目指している。	地域に暮らすご家族の方に運営推進会議を通してグループホームの取り組みを知っていただき、地域への働きかけも広げていきたい。 ご家族のボランティア参加もあり、今後も地域の方のボランティアの受け入れを広げていきたいが、今年度は新型コロナウイルス感染症 流行もあり、現状では事業所内で実施後、書面での報告にとどまってしまう。また、外出行事や定期的に行っていた法人内の行事 もすべてが中止になっており、ご家族の面会なども感染防止策を行いながら、時間制限をしている現状である。新型コロナウイルス感染 症の動向次第ではあるが、現状で出来る方法（タブレットなどを使用したテレビ電話など）を行いながら、今後も少しずつ地域内の住 民、学校や施設などとの交流を広げつつ、利用者が地域に出て行ける機会を提供したい。	事業所の周囲には田園が多く、自然豊かな環境である。法人本部は隣市にあり、事業所 を含めた3つのグループホームを運営している。事業所での職員の離職率は低く、同じメ ンバーで長く勤める職員が多く、風通しの良いチームで理念に則ったケアが実践できてい る。また、職員同士で成長し合いながら、利用者に安心できるサービス提供につながって いる。現在は、新型コロナウイルス感染症対策のため、面会や外出など様々なことに制限 が設けられているが、収束後には、さらにステップアップしようと令和2年の春に異動してき た管理者を先頭に、日々より良い継続した支援に取り組んでいる。

評価結果表

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅰ.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、 意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	日々の暮らしの中で、なるべく多くの利用者とコミュニケーションを取り、本人が何を考え、何を望んでいるのかをくみ取る汲み取る努力をしている。ケアプラン作成時は本人の希望を取り入れている。	◎		○	日々のかかわりの中で、職員は利用者や家族から思いや意向を聞いたり、汲み取ったりできるよう努めている。把握した意向等は、個別記録や看護記録に記録している。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	自分の気持ちを言葉で表現できない場合は、興味を持つ事、表情が明るく穏やかになる事を見つけ出すようにしている。本人の視点になりチームで話し合い検討している。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	入所時には、本人、家族、CM等から細かい情報を取り、本人の希望や意向を確認している。入所後の家族、知人の面会時には普段の様子や気持ちを伝えている。電話やオンライン活用もしている。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	日々の個人記録には、本人の言葉を記録するようにしている。共有ノートにも本人の様子、変化等を記録している。6ヶ月更新のケアプラン、アセスメントにも本人の思いを組み込んでいる。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	ケアカンファレンスやミーティングはなるべく全職員の意見を聞くようにしている。多職種の色々な見方、考え方を大切にしている。				
2	これまでの暮らしや 現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入所時には、本人、家族、CM等から細かい情報を聞き、アセスメントに記録している。入所後も日々の生活の中で、本人、家族、知人等と話す機会を作り、情報を得ている。			△	入居時に、職員は利用者や家族から、これまでの暮らしなどの情報を聞き取り、アセスメントシートを作成している。利用者の生活歴や状態は記載されているが、利用者の馴染みの暮らし方やこだわりなどを特別なことの欄に記載が不十分であったため、今後は、馴染みやこだわりなどの重要性を認識してアセスメントシートに追記するなど、定期的に更新できる仕組みの構築を期待したい。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	◎	利用者個々に応じて、興味ある事、出来そうな事の場の提供を行えた。歌を唄う、字の読み書き、内容の噛み合う会話等、できるようになった利用者2名あり。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	◎	本人の発する言葉、表情等を日頃より観察し、状態把握している。その内容を全職員で共有できるよう申し送り、記録している。話し合ったことは実践に繋げている。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	○	看護師、CM、介護職員他、多職種の意見を聞き、不安や不安定になっている要因を探り、改善に向けての話し合いをしている。主治医に報告し、助言を受けることもある。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	1日の生活の基本の流れはあるが、利用者一人ひとりの生活リズムを大切にしている。その日の体調や気分を見ながら一人ひとりの生活を尊重している。				
3	チームで行うアセスメント (※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	日頃の生活の中で、本人と多く関わり、言葉をよく聞き、状態把握に努めている。本人の気持ちを大切に考え、チームで話し合い、検討している。			○	アセスメントは、医師や家族も含めて相談をしている。介護計画の更新時には、ユニットごとに出勤職員で話し合うほか、事前に参加できない職員にもメモに意見を書いてもらい、反映できるようになっている。意思を伝えることができない利用者もいるため、職員間で話し合い、思いを推測するようにしている。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	多職種の意見を聞きながら、本人がより良く暮らす為に必要な支援を検討しプランを立て、実践している。家族にも理解、協力が得られるよう働きかけをしている。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	ケアプランには「本人の望む暮らし」「本人の困っていること」を記載し、その課題を改善する支援方法を具体的に話し合い検討している。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	ケアプラン作成時には、自分の希望や意見が表現できる方には聞いている。また、家族にも意向を聞き、なるべく達成できるよう具体的な支援内容を心掛けている。				介護計画は、ユニットごとに計画作成担当者が立案している。その際には、利用者の生活状況を観察し、利用者の意向や家族の意見も取り入れている。カンファレンスには家族も参加することもあったが、現在はコロナ禍のため参加を自粛している。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	本人が本人らしく生きがいを持って暮らせるために本人、家族等の意見を聞きながら、多職種と話し合い計画作成をしている。主治医との連携も大切にしている。	○		○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	馴染みの職員との関わり、安心できる環境作りを大切にしている。なるべく害たきりにせず、可能な限り離床を勧め、他利用者や職員との日常生活ができるような内容にしている。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	家族には協力をお願いして、家族と共に本人を支援する内容を心掛けている。コロナ感染予防の為、地域の方との交流が難しく、協力体制が得られなかった。				
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	ケアカンファレンスは全職員が一度に参加できず、日時を変えて参加を募り多数の意見を聞いている。色々な視点から意見を出し合い、全職員で内容は把握、理解、共有できている。			◎	日々の記録用紙の余白には介護計画のサービス内容が印字されており、職員は記録時にも確認することができ、共有が図られている。記録には、利用者の様子は記載されているが、介護計画に沿ったケアの記録は少ないため、今後は記録の書き方を工夫したり、検討して改善したりするなどの取組みを期待したい。利用者が発した言葉は、そのままの言葉で分かりやすく記録されている。また、職員からベッドの配置の変更など、多くの気づきやアイデア等が出され、カンファレンスで検討している。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	日々の個人記録にはケアプラン支援内容を記載している。達成できるとチェックしている。なるべく多く達成されるよう職員間で意識している。また、利用者1名に担当職員が1名付き、月に1度のケアプラン評価を行っている。			△	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	日々の記録には、その日の本人の言葉、表情、行動等、具体的に記録している。いつもと違う言動は、特に意識して記録するよう周知している。			○	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	○	利用者一人ひとりについての気づきや工夫について、職員間で話し合うことは多い。良いと思ったことは、まず実践してみる。その内容は申し送りに記録している。			○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	基本6ヶ月の毎の見直しだが、本人の体調、状態変化があった場合は、見直しを行っている。看取り介護計画を行った利用者1名、体調変化の為、見直しを行った利用者1名あり。			◎	介護計画は、原則6か月ごとに見直しをしている。月1回、各利用者の担当職員を中心に話し合い、変化がない場合は口頭での現状確認となっているが、3か月に1回はモニタリングをして評価をしている。状態に変化があった場合には、その都度介護計画を変更している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	利用者1名に担当職員が1名付き、月に1回、複数の職員と話し合いながら、ケアプラン評価をしている。プラン継続、変更等、内容の確認を行っている。			○	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	看取り介護計画を行った利用者1名あり。主治医、看護師、CM、介護職員、身元引受人とケアカンファレンスを行い計画を作成した。また、状態変化毎に見直しを行った。			○	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	インシデント、アクシデントが起きた場合は、早急にミーティングを開催し、原因、対応策、改善策の話し合いがされた。また、コロナ感染予防の対策会議、水害時の避難会議が緊急に行われた。			○	定期的に全体でのカンファレンスは開催していないが、必要時にはユニットごとに個別のカンファレンスを実施している。朝夕の申し送り時を活用して話し合うほか、共有ノートを確認することにより、職員間で情報を共有している。また、共有ノートには、申し送り等の議事録の添付があり、参加できなかった職員は、確認後にサインすることになっている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	会議は、参加職員が自由、活発な意見交換をしている。普段から自分の意見が遠慮なく発言できるよう職員間の交流や雰囲気作りにも気を使っている。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	△	コロナ感染予防の為、2ユニット間の接触が制限された。朝の合同申し送りが中止となり、全職員参加の会議開催もなくなった。日時を変えての会議に変更し、なるべく多くの職員参加で行った。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	◎	会議内容は、共有ノートに会議報告書コピーを貼付し、不参加の職員にも共有できるようにしている。読み終えたと各自がサインをしている。			○	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	○	朝夕の申し送りは、一人ひとりの利用者について詳しく申し送っている。特に状態変化があった場合は、申し送りノートに記録して全職員が情報共有できる仕組みをつくっている。			○	共有ノートには、アクシデントやインシデント記録など重要事項のコピーを添付し、職員は確認後にサインすることで、確実な伝達ができるよう努めている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	日々の申し送りは、時間をかけ詳しく伝えている。出勤していない職員にもわかるように申し送りノートを活用している。利用者の様子の他、家族とのやり取り、事務的内容等も詳しく伝達できている。	○			

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	意思がはっきり言える利用者の希望には、できる限り意向に沿えるよう努力している。意思が言えない方に関しては、その把握が困難で十分ではない。				洋服やテレビ番組、おやつ、マニキュアの色など、職員は利用者に日常生活の様々な場面で自己決定できるように心がけている。また、利用者が安心して暮らせるように、職員は積極的に声をかけをして、思いや意向を聞いている。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	洋服選び、テレビ番組、食べたいおやつ、マニキュアの色等、小さい事でも場の提供をして、自分で選択して決定する機会を作っている。			○	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	気の合う利用者と自由に会話を楽しむ方、居家でゆっくり休む方、好きなテレビ番組を観る方、テラスや玄関に出て、外の景色を眺める方、洗濯物たたみや新聞折り等、役割の仕事をする方等、それぞれが本人らしく自由に生活している。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	1日の基本となる流れはあるが、その日の本人の体調や気分を見て、起床、就寝、食事、排泄、入浴等の時間をその人のペースに合わせている。無理に他の人に合わせたり、職員の都合を優先することはない。				
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉(かけや雰囲気づくり)をしている。	○	利用者のその人らしい言動や表情を引き出す言葉掛けや雰囲気作りは、職員それぞれの工夫で良くなった。今までに見られなかった利用者の言動、表情が見られる。			○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	本人の思いや意向がつかめない方、話の内容が噛み合わない方にもなるべくコミュニケーションやスキンシップを取るようになっている。上手に関わりをしている職員を手本とし、職員の利用者に対する関わり方にレベルアップを感じる。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	△	職員は「人権」「尊厳」の大切さを理解しているが、忙しい時、余裕の無い時に、利用者の誇りやプライバシーのに配慮する言葉かけや態度にやや欠けている面がある。	○	◎	○	ほとんどの職員は利用者の尊厳などを理解して支援することができている。稀に管理者が気になる行為などを見つけた場合には、職員に注意して改善している。トイレ誘導の際に、耳の遠い利用者に対して職員がつい大きな声を出してしまうことも見られるため、職員が気づいていない場合もあり、管理者はさりげない声をかけをするように指導している。居室への出入りの際には、職員は利用者への声かけやノックが実施できている。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉かけや対応を行っている。	○	「身体拘束廃止」「虐待防止」の研修の機会を持ち、不適切な言葉、不適切な態度について学んできた。職員は意識しながら利用者に関わっている。			○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	職員は利用者にとって排泄、入浴は最も恥ずかしく見られたくない部分だと理解しており、本人の羞恥心、不安、プライバシーに配慮しながら介助を行っている。				
		d	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	△	居室への出入り時、室内に本人がいる場合は、声掛けしたり、ノックをするようにしているが、本人がいない場合にできていない時がある。			○	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	職員は個人情報保護、情報漏えい防止について理解し、遵守している。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けってもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	職員は利用者は人生の先輩と考え、信頼関係を築きながら、感謝の気持ちを持ち、言葉にも出している。日々の生活の中で、「ありがとうございます」「助かります」「等、感謝の言葉が多く出ている。				職員は利用者同士の人間関係を把握し、必要な場合は最小限の介入をしている。問題となる行動が見られても、不快な利用者がいない場合には、職員はあまり制止することなく、後からさりげなくフォローしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	グループホームは共同生活の場であり、利用者同士が共に支え合って暮らすことは大切なことだと理解している。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わえる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	それぞれの利用者の性格、立場、入所歴等を把握し、支援している。周りの状況が理解できている方、意見をはっきり言う方、耳が遠くて相手の話が伝わらない方、集団を好まない方、重度の認知症の方等、様々な方が、生活する内に気の合う同士ができていく。利用者同士の楽しい会話を見守り、独立しそうな方には、相手との仲介に入り交流を進めている。大きなトラブルなく、利用者同士の良い関係、支え合いができている。			○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	双方の間に入り、それぞれの想いや意見を聞くようにしている。頼りになる利用者に助けってもらうこともある。当事者や他利用者の不安やストレスが生じないよう支援している。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係 継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	△	入所時のアセスメント、家族や知人の面会時になるべく多く情報を得ようと努めている。生活の中で本人の昔話を聞いているが、家族の面会が少ない方、疎遠の方の情報がやや少ない。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	面会の多い家族や一部の方の情報はあがるが、全利用者の以前の地域との関係、馴染みの場については把握できていない。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	×	家族の協力、支援を受けられる利用者であれば可能だが、スタッフ対応はなかなか難しい。コロナ感染予防の影響もあり、気軽に外出はできていない。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	△	コロナ感染予防の為、面会中止の期間が長かった。それ以前はいつでも気軽に面会に来て頂いていた。9月頃より面会が緩和され、家族、知人の方に来て頂けるようになった。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	×	コロナ感染予防の影響が出てから、利用者の外出する機会が殆んどなくなった。状態を見ながら近所への散歩、テラスで日光浴、玄関先での気分転換は行えたが、この1年を通してその頻度は少ない。	○	○	△	定期的に、ドライブでコスモスなどの花を見に行ったり、事業所周辺を散歩したりしている。現在は、新型コロナウイルスの感染症対策のため、庭以外の外出を控えているが、重度な利用者も含めて駐車場やテラスに出て、外気に触れることができるよう支援している。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	地域の方やボランティアの受け入れができず、外出支援の協力は得られなかった。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	△	重度の利用者の戸外へ出ることは、テラスで日光浴、玄関先での気分転換程度だった。			△	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	×	近所散歩程度で、普段行けないような場所へは行っていない。コロナ発生以前、家族の協力で県外の息子宅へ外泊した利用者1名いる。				
14	心身機能の維持、 向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	認知症ケアの研修を受け、勉強している。職員8名中、介護福祉士6名配置している。利用者一人ひとりの行動、心理症状について話し合う機会は多くある。				心身の状態の差を見極め、職員は利用者のできることはしてもらう支援をしている。利用者のできそうなことをケアカンファレンスで話し合い、介護計画に取り入れて支援をしている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	専門的なリハビリ等は行っていないが、日常生活の中でなるべく本人自身ができる動作を大切に考えている。歩く、食事を摂る、排泄する、入浴する、睡眠をとる等、本人の力を引き出せるよう支援している。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	◎	利用者の「できること、できそうなこと」については、ケアカンファレンス時に話し合い、プランに取り入れている。日々の生活の中で、利用者一人ひとりの状態観察を行い、小さなことでも本人の興味あることやできそうなことの場の提供強をしている。	◎		○	
15	役割、楽しみごと、 気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	本人が好きなおこと、興味あること、やってみたいこと、得意なこと等の場の提供をしている。洗濯物たたみ、新聞折り、体操カードのハンコ押し、入浴準備、窓辺の花の手入れ、ウサギの世話等、利用者それぞれが楽しみながら行っている。				カレンダーへのスタンプ貼りや花の水やり、掃除、洗濯ものたたみなど、職員は利用者に応じた役割を持って生活できるよう支援している。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	それぞれの楽しみ、興味あること、得意なことを把握し、生活の中でその力が発揮できるよう支援している。	○	◎	○	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	×	地域の祭りを見学する楽しみはあるが、利用者が地域の中で役割や出番が持てる機会はなかった。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしやれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしやれについて把握している。	◎	利用者一人ひとりの好み、個性を把握し、理解を深め、その人らしい身だしなみやおしやれを把握している。				職員は利用者の服装の乱れや汚れなど、不具合がある場合はさりげなく支援している。2か月に1回、理容の訪問があり、利用者は散髪をしている。重度の利用者についても、職員は選択肢を絞って選びやすくするなどの工夫をしている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	◎	好み、個性はもちろん季節やその日の気温等にも配慮している。洋服だけでなく、髪形、持ち物も本人の好みを取り入れている。いつもと違う格好に「素敵ですね」と声掛けしている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	自己決定が困難な方は、コミュニケーションをとりながら一緒に選び、その表情から気持ちくみ取っている。生活歴、年代等を考えながら、その人らしさが出せるよう支援している。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	外出時は、本人と一緒に洋服を選び、普段とは違うおしやれを楽しんでいる。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にせずさげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	口元、食べこぼし、みだれ髪、洋服の汚れ等は、プライドに配慮しながら、さり気なく声掛けして整えている。季節に合わない服、チグハグな着方の場合もさり気なく支援している。	◎	◎	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	2ヶ月毎に訪問理容を受けており、外に出掛ける利用者はいないが、訪問時には本人が好みの髪形を伝えている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	◎	本人の好み、着心地、本人らしさを考えている。看取り体制の方も最期まで本人らしさが保てる工夫、支援を行った。			◎	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	食は大切であると理解している。一連のプロセスも考慮し、楽しい食生活が送れるよう心がけている。				外注業者から食材が届けられ、片方のユニットでまとめて職員が調理をしている。献立も外注業者が立てているが、2か月に1回は事業所との話し合いの場があり、希望を反映してもらうことができている。利用者は、下ごしらえや配膳、下膳などを一緒に行っている。食器等は、馴染みの物は自由に持ち込んでもらい、使用している。職員も利用者と一緒に食べるように努めているが、業務の都合で遅れて食べることもある。利用者の食べこぼしなどがある場合には、職員はさりげなくサポートできている。行事時のある場合には食材の配達を止め、職員が買い物などをして調理をしている。月1回程度、利用者の誕生日には、ケーキなどの特別なおやつを提供している。重度の利用者も、食堂に出てきて食べることができているほか、利用者から希望があった場合には、居室で利用者が一人で食事を摂ることもある。調理方法については、医療職にも相談しながら、その都度職員間で話し合いをしている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	業者の宅配を利用しているので、買い物、献立作り、調理等利用者は行っていない。テーブル拭き、軽い下膳等は行っている。その日の献立を見たり、読んだり、特別メニューは利用者のリクエストにしている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	出された料理を話題にして、得意な料理や料理方法を聞き、昔話をすることが多い。テーブル拭きや軽い下膳を行い、利用者の力を発揮している。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	◎	利用者一人ひとりの好物、嫌いな物、アレルギー等を把握し、台所にはチェックリストがある。苦手と思われていた物の形態を変えたり、声掛けの工夫で食べれるようになった方がいる。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	業者の献立は、季節に応じたもの、郷土料理、新メニュー等、バラエティーに富んでいる。特別メニューは利用者の希望を聞き、正月、花見、ソーメン会、芋炊き等、季節の献立を楽しめている。日々の食事時間は話題が多い。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いどりや器の工夫等)	◎	利用者一人ひとりの状態に合わせた食事形態で提供している。普段の食器を変えてワンプレートに盛り付けたりと食欲が出るよう工夫をしている。ミキサー食から形を残したキザミ食に変更した利用者がいる。現在、ミキサー食の利用者はいない。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	茶碗、箸、スプーンは使い慣れた物を使用している。コップのみ安全性、水分量確認の為、統一の物を使用している。			◎	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	△	食事介助、見守りが必要な利用者がある為、職員は利用者と一緒に食事はしていない。一人ひとりの食事時の安全、食べこぼしのサポート、食が進まない方への声掛け等の支援に努めている。			△	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	その日の献立を会話に取り入れ、食事前から待ち遠しく楽しみになる雰囲気を作っている。食事時間中はテレビを消し、様々な音楽を流している。看取り体制の方も、できるだけ最期の時まで、他利用者と一緒の食事時間が持たてた。	◎		○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	利用者一人ひとりの状態に合わせた食事、水分量を把握し、確保できるよう支援しているが、食べたくない、食べられない方の本人の気持ち、状態を尊重して無理強いはいしていない。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	主治医、看護師、家族と相談しながら、本人にとって良い状態が保たれるよう支援している。その情報は職員間で共有している。食事が少ない方には好物のおやつ、一度に多く水分が摂取できない方には、夜間のトイレ時に勤めたりと工夫をしている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	業者の栄養士が立てた献立を利用している。また、当社の栄養士が必要時、業者との話し合いの機会があり、当事業所にも助言がある。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	日々の手洗い、消毒には注意している。コロナの影響で更に強化している。現在までに感染はない。業者納品の食材に不備あれば連絡して。検査3日分の保存は継続している。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	訪問歯科医師に依頼し、口腔ケアの大切さや誤嚥性肺炎についての研修を定期受けている。訪問時、気軽に質問に応じて頂ける。その知識を日々の口腔ケアに繋げている。				食後等には共有スペースの洗面所で、利用者は歯磨きをしている。管理者は、口腔ケアの介助していない、自分で歯磨き等ができる利用者の口腔内の状態把握が弱いと感じている。利用者の能力に合わせて、磨けていないところなどの介助をしている。歯科医の訪問診療を利用している利用者もあり、必要時には受診につなげることができる。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	△	口腔ケア時に介助が必要な利用者に対しての状態把握はできているが、自立している方に対しては細かくは把握できていない。訴えが生じた時に、確認し対応している。			△	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	訪問歯科の時に、利用者の口腔内の状態や口腔ケアの方法を教えて頂き、日々の口腔ケアに活かしている。また、日頃の困ったことや疑問点を相談している。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	夕食後は、義歯ブラシで義歯を丁寧に洗い、洗浄液使用にて翌朝、清潔な状態で使用できるよう習慣付けている。上手くできない方の洗い直し介助を行っている。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないよう、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	介助が必要な方も自分ができることは声掛けやジェスチャー等であるべく力が発揮できるよう促している。全介助の方の場合は、口腔ケア用スポンジやウエットシートを使用し、口腔内が清潔に保たれるよう工夫している。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	○	訪問歯科対象者に限らず、口腔内の異常が生じた場合は、主治医、かかりつけ歯科医師に連絡、相談している。治癒するまで訪問治療を受けている。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	自分が利用者の立場だったらと考え、利用者の気持ちに寄り添い、尊厳を守ることを意識して支援している。安易にオムツ着用することは、意欲低下、身体機能の低下に繋がることを理解している。				職員は、利用者がトイレで排泄できることを基本として支援している。利用者の様子を観察しながら、カンファレンスで利用者に合わせた排泄用品の使用などを職員間で話し合っている。利用者や家族の意見もしっかりと受け止め、職員は可能な限りトイレへ誘導して排泄を促している。現在、紙おむつを使用している利用者が2名いる。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	△	医師、看護師の助言を受けるが、職員全員がその知識を共有できているとは言えない。研修等で勉強していきたい。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	日々の個人記録、個人別の排便チェック表は全職員が観察に努め、記録している。各利用者の排泄リズム、排泄前の動き等、把握できており、職員間の情報共有もできている。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	○	利用者の状態変化を常に観察し、その時の状態に合った紙パンツ、パッドを使用できるよう話し合い、検討する機会は多い。利用者により理由を説明し、心身共に負担が少なく、安心できる対応をしている。家族にも説明を行い、同意を得ている。	◎		○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	日々の申し送り、その都度の話し合いで、安易にその状態にせず、少しでも改善できる方法を検討し実践している。必要時には、主治医、家族に相談している。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	排泄のリズムの把握、本人の動きの観察等により、早めの声掛けやトイレ誘導を行っている。上手くできた時は、利用者と共に喜び、次への自信に繋げている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	利用者のその時の状態により、おむつ、紙パンツ、パッドの選択をしている。夜間、日中、頻度等、本人や家族に説明しながら、なるべく納得いく選択をしている。サンプル等で試してみることもある。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	◎	利用者一人ひとりのその日、その時の状態をみて、随時使い分けている。外出時、緩下剤内服時等、配慮している。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	毎日の体操、適度な運動、近所やテラス散歩等、運動を取り入れている。必要な方には牛乳を提供したり、軽く腹部マッサージを行い、自然排便を促す工夫をしている。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)。	○	利用者毎に曜日、時間は決めているが、その日の体調、状態により変更するようにしている。決して無理強いはいしていない。季節に応じて湯温調節、入浴剤の選択、脱衣所の温度調節、音楽を流す等、環境整備に努めている。	◎		○	週2回以上、利用者は入浴することができる。入浴は午前中を中心に実施しているが、利用者の希望があれば、午後入浴にも対応している。湯温や時間、入浴剤などは、職員は利用者の好みや希望を聞いて、個別に対応している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	◎	利用者の話を傾聴したり、歌を唄ったりと各利用者が自分のペースでくつろいで入浴できるよう配慮している。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	残存能力が活かせるよう、できることは自分で、できない面を手伝っている。また、どうしても困難な面が少しでもできるようになるか工夫もしている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	利用者の様子、状態について話し合い、入浴前から接し方を工夫して、入浴したい気持ちになるよう支援している。その気にならない場合は、足浴、更衣のみしたり、日にちを変更している。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴前のバイタル確認、本人への同意を確認している。入浴中、入浴後の体調観察を行い、必要時は看護師、管理者に報告、適切な対応を行っている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	毎日の状態観察、個人記録により、利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。不眠、トイレ頻度等、異常があれば申し送りにて全職員で情報共有できている。				どうしても利用者が眠れない場合には、医師と相談しながら内服薬を処方してもらっている。ほとんどの利用者は、日中の活動量や起きている時間を増やすことなどにより内服薬を使用せず眠ることができている。また、入居後に内服薬が不要になった利用者もいる。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	朝夕の申し送り時に、その日の生活の様子、排泄状態、職員や他利用者との関わり、認知症状等を伝え、不眠の原因を考えている。本来の睡眠状態が整うよう対応策を検討、実践している。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	現在、睡眠導入剤を使用している利用者2名おり、主治医には定期状態報告している。転倒予防、生活レベル低下を考え、必要最小処方の指示がある。無理のない範囲で日中の活動を増やし、精神的に不安や心配事が軽減され、夜間の睡眠に繋げるよう支援している。			○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	利用者の居室は一人部屋で、落ち着いて休息や昼寝ができている。馴染みの私物を置いている。ホールソファ、玄関ホール、テラス椅子等で自由に休息できている。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	本人の希望や家族からの電話で話す機会を作っている。コロナ感染予防の為、面会中止になってからは、テレビ電話、スマホ動画にて交流ができるようにした。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	以前は電話で話せないと思っていた利用者数名に電話やテレビ電話をする機会を作った。内容は噛み合わないが、家族から喜ばれた。今後、疎遠の方との交流を考えて行きたい。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	利用者、家族には、遠慮しないで電話できることを伝えている。私物の携帯利用者2名あり。毎日のように家族と話している。家族と疎遠の方の電話ができている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	届いた手紙、葉書は必ず、本人に渡しているが、読めない方には、職員が読んで理解できるようにしている。また、要望に応じ、お礼の電話を取り次いでいる。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	家族には、本人が電話することに理解、協力を頂いている。家族にもいつでも電話やテレビ電話ができることを伝えている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	職員は本人がお金を所持し、必要な物を買ったり、使える楽しみを理解し、なるべくその意向に沿えるよう支援している。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	○	日常的ではないが、職員同行にて楽しみの外食に出掛ける利用者がいる。個々の必要物品や欲しい物の希望は聞いている。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	△	利用者の買い物は、職員同行で駐車場から店までの距離、段差、トイレの有無、混まない店等を考慮している。必要時は店員に認知症、高齢者であることを伝え、協力依頼している。コロナの影響で利用者の買い物に出る機会がなくなった。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	お金は所持しないことが基本だが、本人の安心の為、小額のお金を所持している利用者は数名いる。所持していない方の必要物品や要望があれば、立て替えにより、職員が買い物を代行している。お金を持たなくても心配ないことを本人に伝えている。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話合っている。	○	ほとんどの利用者の家族が管理している。生活保護受給者は家族との相談、同意の上、会社で管理している。本人の安心の為、小額のお金を所持している方は数名いる。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしておき、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	◎	基本、家族管理だが、本人、家族が管理できない場合は、同意の上、会社が管理している。管理している方の家族には、必要な買い物事前に伝え同意を得ている。また、毎月の請求時に出金明細、通帳残高を報告している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	その時々ニーズに対して、家族と相談しながら、本人にとって良い方法を考えている。緊急時の病院受診、看取り時、死亡時、成年後見制度利用等、様々な支援を行った。	◎		○	利用者の希望により、職員が馴染みのかかりつけ医への同行受診をしたり、地元の桜を見に行くことが実現するなど、職員は家族等と相談しながら対応している。入居後に、成年後見制度の利用につながった事例もあるなど、利用者の権利擁護の支援にも取り組んでいる。

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	×	ホーム外周りは外壁がなく、明るくオープンな雰囲気である。花壇、庭木の手入れ等環境整備をしている。コロナ感染予防、利用者の安全、外部からの危険防止等により玄関の施錠時間が長い。	◎	◎	○	玄関前の花壇やプランターには色とりどりの花が植えられており、利用者や来訪者は四季を感じることができ、来訪しやすい雰囲気づくりをしている。玄関を入ると長いすが置かれてあり、コスモスが活けられていた。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそごような設えになっていないか等。）	○	中庭を囲み、コの字型の広い平屋で、明るくゆったりとした雰囲気である。天窓からは明るい日差しが差し込む。共有の空間には、利用者の写真、季節の風景写真、花、季節に応じて手作りの装飾をしている。ウサギ1羽を飼育しており、利用者の癒しになっている。	○	○	○	玄関を入ったところで、ウサギを1羽飼育しており、利用者等の癒しの場となっている。共有スペースには、オープンキッチンや畳コーナー、いす席、テレビとソファ席があり、季節のクラフトが飾られている。事業所内は、天窓からの採光が入り明るく、整理整頓もなされ非常に清潔感がある。テラスから見える田園風景は、季節感に溢れている。また、廊下には、行事の時の写真が誰でも自由に見られるようにアルバムを掛けられている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	ホーム周辺は田畑で車通り少なく、雑音がない。天窓があり、室内はとても明るい。換気には特に気を使っている。朝、夕の掃除は行き届いている。	/	/	/	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節感を感じるもの）を生活空間の中に取り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	天気の良い日は、なるべくテラスや玄関先に出て、季節を感じて頂いている。季節ごとに変わる写真や装飾を楽しんで頂いている。	/	/	/	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合う利用者同士、自由にゆっくり楽し過ごす時間を持っている。一人部屋で過ごしたい時は、本人の同意を得て、入口ドアを少し開けさせて頂き、寂しい想いをせず安心して休んで頂いている。	/	/	/	
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	◎	トイレ、浴室は共用空間から見えない配置にされている。プライバシーに配慮している。	/	/	/	
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	◎	音楽が好きな方には、CDデッキを用意している。自室にテレビ、携帯、仏壇を持参している方数名あり。花が好きな方の為に部屋の窓辺にプランター・花壇を作った。各部屋には家族、本人の写真や手紙、馴染みの物を置いている。	◎	/	○	居室には、ベッドやチェスト、洗面台、クローゼットが備え付けられている。利用者は馴染みの物を持ち込みことができ、仏壇や家具、テレビ、写真、携帯電話などを自由に配置し、利用者に合った居室づくりができています。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	場所が分らない人の為にトイレや手洗い場に表示の張り紙をしている。居室前には本人の写真や名札を貼り、分りやすくしている。居室内のタンスには仕分けできるような種類別の名前表示している。なるべくできることが増えるよう工夫している。	/	/	◎	新型コロナウイルスの感染症対策として家族等の面会制限をしているため、タブレットを購入しSNSを活用して面会を支援している。タンスの中に入っているものが分かるようプレートを貼ったり、トイレや御手洗いなどを複数表記するなど、利用者が混乱しないような工夫が見られた。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	不安や混乱が生じた場合は、職員間で話し合い、改善に向けた対応策をとっている。良いと思った案は、まず実践するようにしている。	/	/	/	
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ぼうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	△	生活空間の中に置いているが、使用する時には、職員に声をかけて頂くようにしている。すべての物を利用者全員が自由に取ったり、使用できたりはしていない。希望や要望があれば、意に沿うようにはしている。	/	/	/	
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	△	代表者、全職員は、玄関やユニット間の施錠をすることで起きうる弊害の理解はできている。現在、全利用者の居室ドアの施錠はしていないが、コロナ感染予防他の理由で玄関、ユニット間の施錠をしている。自由の大切さと安全確保の両面が大きな課題である。	×	×	×	常に職員が利用者の見守りを行うことが困難な場面もあり、玄関は安全面を考え、日中・夜間ともに施錠をしている。散歩の時などには、職員が開錠する対応をしている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	家族には、玄関施錠については、コロナ感染予防、利用者の安全、外部からの危険防止を説明し、理解を得ている。職員の目のある間や必要時はなるべく鍵をかけない時間を増やすようにしてきた。	/	/	/	
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	△	職員が一緒にいる時や行事等の時は、なるべく鍵を外し、オープンにする時間を作っているが、1日の中でやむを得ず施錠している時間は長い。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4) 健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	病歴は入所時の情報提供により、個々のアセスメント表に記録し、把握している。入所後も状態変化等、主治医と連携を取り、現病も把握している。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	毎日のバイタル測定、本人の表情、訴え等の観察により、異常の早期発見に努めている。異常や変化は日々の個人記録、共有ノート、医療関係ノートに記録している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	医療連携体制が充実され、必要時には、24時間いつでも担当看護師に報告、相談できる体制ができています。主治医、かかりつけ医にも早めに報告、連絡体制ができています。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	入所時に本人、家族が希望する主治医、かかりつけ医を決めているが、入所後、意向の変更があれば意に沿うよう対応している。本人、家族が安心して受診できることが大切だと考えている。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	医療連携体制の強化により、本人、家族、事業所との連携が密に取れている。訪問診療時には、看護師が詳細に情報提供をし、病院受診時には、本人の日頃の様子、気になる点を手紙で知らせている。必要時は家族と共に病院受診している。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	通院は、必要時、看護師が同行することはあるが、基本、家族同行としている。その際は、医療連携看護師からの手紙による情報提供を行っている。本人、家族、主治医、事業所との連携は取れている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院時には、本人のアセスメント、入院に至るまでの詳しい経緯等の情報を医療機関に伝えている。本人に混乱や負担が少しでも軽減されるよう努めている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	医療機関へ情報提供を行い、安心して治療できるよう支援している。病院の地域連携室と密に連携を取り、できるだけ早く退院できるよう努めている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	日頃から本人受診時には、主治医へ情報提供を行い、本人が入院が必要になった時にスムーズに運べるよう、医療機関と連携を持っている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	介護職は、利用者一人ひとりの状態の変化、気になること、気づきを看護師に迅速に報告、相談している。看護師から主治医へ内容を報告、相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	医療機関看護師へいつでも気軽に報告、相談できる体制が取れている。職員は安心して勤務ができています。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	毎日のバイタル測定、本人の表情、訴え等の観察に努め、異常の早期発見に努めている。異常時には、看護師に報告、相談し、早めの医療機関への報告ができています。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	△	一部の職員は理解があるが、職員全員が各利用者の薬の内容は把握できていない。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	薬処方方は名前、服用時間の記載依頼、薬局による配薬、看護師がその日の配薬、その日のリーダーが再確認、看護師または職員が本人へ内服確認する。確認を何度も重ね誤薬防止に努めている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	本人の表情、食事摂取量、活動、便秘、下痢等の状態観察に努め、変化や気になることは看護師に報告、相談している。薬の変更があった場合は、特に注意している。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	本人の状態観察に努め、日々の個人記録、申し送りノートに記録している。必要時は、看護師から主治医、家族へ伝えている。				

愛媛県グループホームユニットまつやま

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	入所時に重度化した場合の看取りの指針を説明している。状態変化の段階ごとに家族と話し合い、意向を確認している。この1年で看取りを行った利用者1名あり。後見人の方と密に話し合いを行った。				事業所には、「重度化した場合における（看取り）指針」があり、入居時に職員は利用者や家族に説明している。看取り支援時には、家族や医師、看護師、介護支援専門員、職員で話し合い、情報を共有して同意書を取ったうえで支援している。実施した支援内容は、個別に記録されている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	看取りを行った利用者について、終末期のあり方、支援内容等を後見人、主治医、看護師、職員と話し合い、統一した方針を共有した。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	管理者は、終末期の対応について、事業所がどこまで支援、対応ができるかを見極めている。できないことを家族にはっきり説明することで、職員は安心して勤務できる。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	当事業所で「できること・できないこと」について、看取りの指針を基に家族、主治医に十分説明し、理解を得ている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	看取り体制の利用者1名あり。後見人、主治医、看護師、職員が連携を取り、チームとして本人を支援した。希望通り、最期の時まで、できるだけ普段通りの日常生活が送れるよう支援し、チームも落ち着いて支援ができた。医療連携体制のレベルアップが大きかった。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。（心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等）	○	重度化するまでの家族との関係性を大切にしている。日頃から親身に対応することで信頼関係を築いている。本人の状態変化の段階毎におきる家族の気持ちに寄り添う支援をしていきたい。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症（ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等）や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	コロナ感染の予防対策を含め、感染症についての研修で勉強し、知識を深めた。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	◎	感染予防、対応の仕方、嘔吐物処理方法等、学ぶ機会があった。コロナ感染予防については特に多く学び、体制を整えることができた。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	○	コロナ感染に関する情報は、行政、関係医療機関、インターネット、メディア等から感染発生状況等を入手し、早めの対応を行った。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	◎	特に県内のコロナ発生状況の情報収集に努め、早めの対応を行った。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	いつもより増して、この期間は、特に手洗い、うがい、体調チェック、県外との行き来確認等を職員、来訪者に徹底し感染予防を行った。利用者も同様に健康管理に気をつけた。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ. 家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	職員は、個々の利用者と生活の中で、家族のことを話題にすることは多い。家族の協力は多くあり、本人を支えるチームの一員であると考えている。家族との関係を大切にしている。				地元の社会人野球チームや幼稚園児を招いて餅つきをしたり、法人内の事業所合同で運動会を開催したりしていたが、今年は新型コロナウイルス感染症対策のため中止していることもあり、家族へ行事参加の機会も提供できていない。面会の制限もあり、家族等に事業所での利用者の様子を知らせてもらうため、毎月写真を中心にした事業所便りを発行するほか、3か月に1回は各利用者の担当職員から家族に手紙を添えている。また、事業所ではタブレットを購入し、SNSを活用した利用者の面会も支援しているほか、状況を見ながらシールド越しで面会できるよう支援している。家族と話す機会も減っているが、職員は面会時等を活用して、積極的に声をかけ、意見や要望を聞いている。運営上の出来事は、事業所便りを活用して周知している。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	コロナ感染予防の為、面会中止になった期間はあるが、面会が自由にできていた時は、家族が遠慮せず気軽に来れる雰囲気作りを心掛けていた。居室や面会室でゆっくり過ごしていただくよう配慮した。宿泊する家族はいなかった。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	△	以前はできていた家族の行事参加が、コロナ感染予防の影響で殆んどできなかった。	○		△	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	◎	毎月、全員の家族に日常の写真を載せたホーム便りを発送している。また、各担当者は、定期的に利用者の近況や様子を手紙でお知らせしている。コロナ感染予防の為、面会中止になってからは、電話、スマホ動画、リモート画像で交流を図っている。	○		◎	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的な内容を把握して報告を行っている。	○	ケアプラン更新時や家族来訪時に近況を伝え、気になること、不安に思うことの相談には親身に対応している。遠方の方、面会の少ない方には、電話にて相談、報告している。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	これまでの本人と家族の関係の形はそれぞれ違いがあるが、あるがままを受け入れるようにしている。家族に戸惑いや不安が生じることがあっても、本人の気持ち、状態を伝え、家族と共に支援していくようにしている。以前に比べ、前向きに考える家族がいる。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	毎月、発行するホーム便りにて、その都度、報告している。また、家族からの質問にも説明を行い、理解、協力を得ている。	○		○	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	△	現在、家族会は行っていない。地域運営推進会議で交流はあるが、行事等の家族参加がなかった。				
		i	利用者一人ひとり起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	なるべく自分でできることは自分で行うことを目指しているが、リスクも大きいことは、家族に説明している。家族の希望や意見を聞きながら、なるべく抑圧感のない生活を話し合ってきた。				
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	◎	契約時に契約の締結、解約の内容の説明は行っている。契約締結時にも、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退居については、本人、家族にとって一番良い選択になるよう相談してる。納得のいく退居先に移れるよう支援体制がある。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	契約時、契約書に沿って、料金設定を詳しく説明している。説明済みにはチェック箇所がある。利用改正時には、文章で理由を含めて、内容、料金を説明し、理解、同意のもと、紙面で得ている。また、問い合わせにも応じて説明している。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	△	事業所設立当初から地域運営推進会議を通して、事業所の取り組みを伝えているが、それ以外の交流は少ない。		○		事業所として町内会に加入しており、回覧板を回したり、散歩時には地域住民に挨拶を交わしたりすることはできているが、地域からの働きかけはまだまだ少ない。管理者は、もっと地域との交流を持ちたいと考えている。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	△	近隣の方とは利用者の散歩途中、屋外環境整備、職員出勤時等に挨拶や立ち話をするはあるが、町内会、自治会、行事参加はできていない。		△	△	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	△	秋祭りの神輿入りの時、馴染みの方が利用者と親しく接して下さる。それ以外の近所の方の見守りや支援が増えていない。				
		d	地域の人気が気軽に立ち寄ったり遊びに来たりしている。	×	コロナの影響の中、できていない。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	×	散歩時の挨拶程度で日常的な交流には至っていない。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	×	面会中止、ボランティア活動受け入れ中止の状態で、利用者の生活にも影響を受けた。。ホーム内の行事やレクリエーションは行ったが、外部との交流は殆んどなかった。				
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	×	一人ひとりの暮らしを支える地域資源の活用は殆んどできていない。今後の課題として取り組みたい。				
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	△	災害時、近隣の地域福祉施設への一時避難場所の協力はある。消防署立ち合いの避難訓練、他事業所との交流がある。利用者の生活に密接した近隣のコンビニ、飲食店、スーパー、公民館等との交流ができていない。				
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	少しずつ新しい参加者が増えてきた中で、コロナ感染予防の為、外部からの参加ができなくなった。	○		○	運営推進会議は、新たに地元の民生委員などに声をかけ、以前は参加してもらえなかった方にも参加してもらえることができている。現在は、新型コロナウイルス感染症対策のため、書面での会議となっている。会議では、利用者の様子やサービスの実際など報告を行い、参加者と意見交換をしている。会議の中で話し合われた内容は議事録に残しているが、参加できていない職員やメンバーまでは回覧等ができていない。今後は、参加者から出された意見やその後の取り組み状況から結果まで流れとして議事録に残すなど、多くの関係者と会議内容を共有できることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	○	地域運営推進会議では、毎回、利用者の生活の様子、ホームの行事、取り組みを報告している。市役所介護保険課、地域包括、当事業所事務局に内容を報告している。			○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	○	頂いた意見等には次回の会議にて報告している。また、職員にも報告書にて内容説明をしている。		×	△	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	△	徐々に新しい参加者が増えてきた中、コロナ感染予防の為、外部からの参加が中止となった。		○		
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	△	地域運営推進会議の内容は玄関ホールに掲示しているが、ホームページ等には公表していない。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	◎	理念に基づいたケア目標をホーム内の数カ所に掲げ、職員全員で常に意識している。代表者、管理者、職員は理念内容を理解し、共有認識を持っている。全職員は自己目標を持ち、半年に一度、振り返りを行い、管理者が達成状況を確認している。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	2カ月毎の地域運営推進会議、毎月のホーム便りには、事業所の理念、ケア目標を書き入れ、その取り組みを伝えている。	◎	×		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	全職員は、年間3回以上の研修を受講し、その内容や感想報告書を提出している。代表者、管理者は個々の職員に必要な研修を勧めている。コロナ感染予防の影響で外部研修の機会が少なく、内部研修が多かった。				代表者は、隣市の事業所に常駐しており、何かあれば必ず駆けつけることができる。また、令和2年の春に異動してきた管理者は、どの職員からも話しやすいような環境づくりができています。もともと事業所での職員の離職率は低く、長年同じ職員が勤めていることもあり、利用者に安心できるサービスが提供につながっている。また、法人・事業所として、介護福祉士の資格取得のため受験費用を助成したり、カウンセラーによる職員の面談を実施している。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	チームの方向性、各職員のスキルアップができるよう取り組んでいる。新たに「喀痰・吸引」の委員会を毎月、行うようになり勉強している。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	全職員は年2回、自己評価、振り返り、管理者評価を代表に提出している。必要時は、代表による面談が行われる。代表者は各職員の意見や希望を聞きながら、職場環境、労働条件の整備に反映している。それにより、職員のやりがいやモチベーションアップに繋がっている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	△	コロナ感染予防の影響で、地域密着型サービス協会、相互研修、ケアマネ連絡会他の研修会の参加が少なく、交流の機会が少なかった。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	管理者から代表へ各職員の勤務態度、希望、悩み等の報告、相談が行われ、必要時には代表との面談を設けている。	○	○	◎	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	◎	3カ月毎に身体拘束廃止、虐待防止委員会を開催している。虐待や不適切な行為について、それにあたる行為をしていないかを振り返ったり、毎回、違う課題を設けて勉強している。				虐待防止委員会を3か月に1回実施しているほか、年1回内部研修を実施し、職員の虐待防止等の理解に努めている。外部研修に派遣した場合には、職員が研修の伝達報告を行い、職員間で共有している。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	朝、夕の申し送り時には、日々のケアについて話し合う時間を取っている。日々のケアの中で疑問に思う事、虐待が疑われる事があれば、職員は管理者に相談している。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見逃ごされることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	3カ月毎の虐待防止委員会にて、日頃の職員の接遇を互いに意識しあって、不適切なケアを見逃ごさないよう話し合っている。問題ある場合は、管理者に報告している。			○	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	チームケアを大切に考えている。職員に悩み、疲労、ストレスが生じた場合は、管理者、他職員と話し合い、勤務交代、休暇をとる等、チームで助け合っている。悩みを一人で負わないよう相談できる関係性を大切にしている。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	虐待防止、身体拘束廃止委員会により「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」「緊急やむを得ない場合」について、全職員に繰り返し説明している。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	現在、当事業所に於いて、身体拘束にあたる行為は行われていないが、日常、気付かないうちに虐待や身体拘束が行われているかもしれないという危機感を持つようになっている。				
		c	家族等から拘束や施設への要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	現在、家族等からの拘束、施設への要望はないが、今後、やむを得ず身体拘束を行う場合は、話し合いを重ねながら理解を頂き、廃止に向けての対応を行っていく。				

愛媛県グループホームユニットまつやま

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する 制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	○	過去に研修を受けた職員から他職員に知識を伝えている。現在、成年後見制度を利用している利用者一名おり、詳細な内容が更に職員の知識を高めている。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	○	成年後見制度を利用するまでに家族からの相談に親身にのり利用に至った。今回の事例をもとに今後、希望がある方には親身に相談、支援にあたりたい。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	必要時には地域包括支援センター、専門機関に相談できるよう連携を取っていく。また、当社の弁護士に相談できる体制はできている。				
46	急変や事故発生時の 備え・事故防止の 取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	緊急時の連絡体制網は職員配置の変更があれば、すぐに見直し、連携がスムーズにとれるよう準備されている。怪我、事故、急変時のマニュアルがあり、全職員に周知されている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	応急手当、初期対応のマニュアルで知識は備えているが、いざという時、全職員が対応できるかという不安はある。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	◎	数回の転倒等のアクシデントがあり、何度も話し合いの場が持たれた。アクシデント報告書を再提出する等、職員間の事故に対する危機感の意識がかなり高まった。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	◎	利用者一人ひとりの日々の状態変化を観察し、職員間で話し合う機会が多い。誤嚥しない食事提供、転倒防止の歩行者、居室内の環境整備等、自立支援を尊重しつつ早目の事故防止対応を行っている。				
47	苦情への迅速な対応と 改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	苦情対応マニュアルは設置されている。地域、家族等からの大きな苦情は起きていないが、今後、意見や苦情があれば前向きに検討していく。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	利用者、家族、地域等からの大きな苦情は起きていない。市町への報告事項もない。家族からの夕食時間についての意見があり、時間の見直しがされた。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	苦情が寄せられた場合は、速やかに対応し、前向きな話し合い、改善に向けて内容を検討していく。日頃からの関係作りを大切にしていきたい。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	利用者が遠慮なく意見、要望、苦情等が言えるよう、日頃からコミュニケーションを多くとる努力をしている。地域運営推進会議には、数名の利用者の参加の機会があり意見を述べた。			○	職員は利用者から苦情が出ないように、日々の関わりの中で意見や要望を確認し、可能な限り対応している。家族からは、面会や電話連絡時に要望を聞いている。管理者は職員から信頼され、様々な職員の意見を拾うことができている。また、法人本部からも、きめ細かい指示や労いの付箋が頻回に届いている。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	家族とのコミュニケーションを大切にしている。以前より頻度は多くなっている。地域運営推進会議には、なるべく違う家族参加をお願いした。コロナ感染防止の為、後半は参加なし。	○		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	玄関ホールに苦情窓口を紙面に掲示している。また、意見箱の設置がある。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	代表者は毎月行われる管理者会議により事業所内の様子を把握している。必要時は、現場の様子を見学し、直接、職員と話す機会がある。必要時は、個々職員との面談がある。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	◎	管理者は、現場での勤務時間が長く、24時間いつでも連絡がとれる体制ができている。利用者本位の支援をしていく為の目標を持ち、個々の職員の意見を聞いている。一方的にならず意見、提案を大切にしている。			◎	

愛媛県グループホームユニットまつやま

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	◎	年1回、自己評価の項目を全職員で確認、評価してサービスの更なる向上を目指している。				外部評価の自己評価の作成には、職員全員で取り組んでいる。サービス評価の実施にあたり、利用者や家族、各機関と共有できる書面での仕組みづくりなど、さらなる取組みを期待したい。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	○	評価を通して、できていることの継続、できていないことの改善、新たな問題、課題を確認している。その内容は、職員会議により全職員に周知している。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	△	地域との交流に力を入れたかったが、コロナ感染予防の為、外部との交流が殆んどできなかった。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	毎月発行のホーム便り、地域運営推進会議において、評価結果や目標達成計画を紙面で報告している。	×	×	△	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	地域運営推進会議で報告し、その内容を玄関ホールに掲示している。誰にでも閲覧できるようにしている。職員にも会議にて内容報告し、共有できている。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	◎	様々な災害マニュアルを作成している。火災、地震、風水害の訓練時には、事前より予定表を詳しく作成し、各職員に分担内容を説明してから訓練に臨んだ。				事業所では、火災や水害、地震を想定した避難訓練を実施している。今年度に入り、新型コロナウイルス感染症対策のため、地域住民や家族が参加した訓練はできていない。運営推進会議等を通して、地域住民等と防災について話し合っている。水害を想定した訓練では、実際に隣市の系列事業所等まで、実際に車に分乗して利用者と一緒に非難を体験している。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	◎	特に風水害の避難訓練に力を入れた。詳細な計画を立て、他事業所の応援を受けながら避難訓練を2回行った。また、風水害を想定し、利用者を帰宅、病院入院、ホテル宿泊に分け詳細な計画を立てた。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	保安協会、消防署の定期点検を受けている。避難経路の環境整備も常に意識している。非常食、備品の定期点検を行っている。雨水侵入止、各利用者の衣類、特長入り名札、オムツ類の非常袋を追加した。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	地域運営推進会議を通して、地域住民、消防署との連携を大切にし、訓練や相談をしている。緊急の避難先として近隣の福祉施設の協力体制をとっている。	△	×	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	△	事業所内の災害時避難訓練には、消防署、地域の方の協力があるが、災害時想定との共同訓練には参加できなかった。今後、地域との協力、強化が課題と考えている。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	○	認知症ケアについての内部研究の機会は多かった。地域運営推進会議で地域の方へ認知症ケアの内容をお伝えする機会があり、地域の参加者から相談を受けることもあった。				事業所では、入居相談含めて地域住民等から相談があれば、その都度対応している。最近、近くの高校から学祭への招待があったが、新型コロナウイルス感染症対策のため中止となっている。管理者は、コロナ禍の対策以前から、地域のケア拠点等の取組みは課題となっていたところであり、収束後には課題への対応を考えている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	入所希望者、その家族には、相談支援を必ず行っている。入所している利用者家族とも本人だけでなく、家族自身の相談があれば応じている。地域の方へ認知症ケアの相談の場であることを広めたい。		×	○	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	×	コロナ感染予防があり、地域の人々が集う場所として解放、活用ができていない。今後の課題として取り組みたい。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	コロナ感染予防の為、恒例だったボランティア活動、中学生実習の受け入れが中止になった。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	×	地域活動を行いたいと思いつながら、職員勤務時間等により、参加できていない。今後の課題として考えたい。			△	